

### 靖國神社年越し詣で

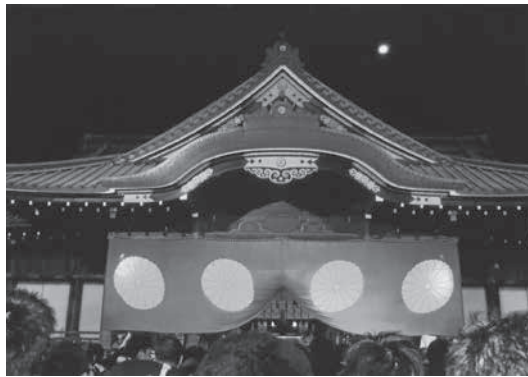
平成26年暮れの大晦日から27年元旦にかけて、恒例の靖國神社年越し詣でを行った。平成26年も、我が日本列島は、広島を始めとして異常気象による極地豪雨、土砂崩れ、竜巻等の大災害

が多く、異常高温にも悩まされた。また、木曾の御嶽山の大噴火により、大勢の犠牲者を出した。更に東日本大震災と福島第一原発事故による災害復興は3年9ヵ月余を経てなお遅々として進まず、アベノミクスによる経済再生への兆しは見えるものの、未だ庶民の

実感としては現れておらず、安倍晋三内閣の奮闘努力によってもなお、政治の混迷が続く中、依然として中国の艦船による度重なる尖閣諸島領域侵犯、小笠原諸島周辺における宝石珊瑚の大々の密猟、韓国による竹島、ロシアによる北方四島、それぞれの実効支配の強化、執拗な中韓両国の歴史認識の捏造、北朝鮮の核・ミサイル発射の危険等国内外の鬱屈した情勢の中で推移したが、秋から暮れに至って漸く状況が上向いてきた感がする。

暮れの12月14日の衆議院議員総選挙に圧勝し、24日、自公連立による第三次安倍内閣が発足した。総理は、まずアベノミクスの第三の矢による雇用の増大、賃金の上昇、地方創成による経済の活性化を目指し、更には、国防・安全保障を確たるものにすべく力強い一歩を踏み出している。

明ければ平成27年、乙未の年、十干十二支に当てはめて、60年に一度廻っ



元旦午前零時の靖國神社拜殿前・右上空に輝く月



年越し詣での人波第一波（神門開扉直後）

報 特 攻  
平成27年2月

### 第104号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-1-1靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (5213) 4594  
FAX 03 (5213) 4596

http://www.tokkotai.or.jp  
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能  
発行人 羽淵徹也  
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

靖國神社年越し詣で	16
皇居参賀二題	14
平成27年「宮中歌会始」の御儀	11
平成27年度「特攻勇士慰霊祭」	11
大阪護國神社「特攻勇士慰霊祭」	11
平成26年度原町飛行場関係戦没者慰霊祭に参列して	11
平成26年度明野忠魂塔合祀慰霊祭に参列して	11
平成26年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参列して①	11
平成26年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参列して②	11
海軍築城基地・神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊出撃の地を訪ねて	11
第1空挺団研修に参加して	11
「英霊を偲ぶ心の旅」に参加して①	11
「英霊を偲ぶ心の旅」に参加して②	11
《読者の声》軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭から思うこと	11
新刊図書紹介	11
特攻に関する新聞記事紹介	11
ハチの一刺し「特攻精神と武士道と」葉隠に学ぶ	11
平成26年度第3回理事会及び臨時評議員会の実施報告等	11
事務局からの報告等	11



靖國神社奉納大絵馬

平成26年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参列して①	11
平成26年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参列して②	11
海軍築城基地・神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊出撃の地を訪ねて	11
第1空挺団研修に参加して	11
「英霊を偲ぶ心の旅」に参加して①	11
「英霊を偲ぶ心の旅」に参加して②	11
《読者の声》軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭から思うこと	11
新刊図書紹介	11
特攻に関する新聞記事紹介	11
ハチの一刺し「特攻精神と武士道と」葉隠に学ぶ	11
平成26年度第3回理事会及び臨時評議員会の実施報告等	11
事務局からの報告等	11

てくる還暦であるが、歴史を繙いてみると、60年前の乙未の年は昭和30(1955)年、同年8月6日には、第一回原水爆禁止世界大会が開かれた年であり、日米原子力協定が結ばれ(11月14日)、原子力基本法が公布された(12月19日)年でもある。一方、米軍基地反対闘争が激化し、米軍の北富士演習場での実弾射撃に対する反対闘争、砂川基地反対闘争がいずれも5月に始まった。国際情勢も、東西冷戦が続く中、ワルシャワ条約が締結され、西独がNATOに正式加盟するなど、緊張の高まりを来した年であった。国内政治では、その年の11月15日、自由民主党が結成され、保守合同が実現して、いわゆる55年体制が始まった年でもある。

更に60年遡って120年前の明治28(1895)年は、明治維新後最大の国難であった日清戦争が終結し、下関(馬関)日清講和条約の締結された年である。その日清講和条約の第1条には「清国ハ朝鮮国ノ、完全無欠ナル独立自主ノ国タルコトヲ確認ス。因テ右独立自主ヲ損害スヘキ、朝鮮国ヨリ清国ニ対スル貢献、典礼等ハ將來全ク之ヲ廢止スヘシ」とあるように、朝鮮の独立が確認されている。日清戦争は、明治日本が初めて経験した対外戦争で

あった。しかも相手は老いたりとはいえ、人口・版図とも我が国の10倍以上の超大国の清である。国民は不安に戦きながらも維新で築いたばかりの新生国家の命運を賭して、上下・官民心を一つにして国難に当たった。その結果は、日本の大勝利となり、台湾・澎湖島及び遼東半島の割譲等、版図の拡大と賠償金の獲得となった。しかし、それも東の間、露・仏・独三国の干渉により、遼東半島の返還となった。以後10年にわたり我が国は臥薪嘗胆、国力と軍事力の増強に努め、迫り来る大国ロシアの南侵に備え、遂には、挙国一致、敢然と立ち上がり、多大の犠牲を払いつつも奮戦敢闘、ロシアの大軍を駆逐し、更には、大艦隊を迎え撃って大勝利を博し、ポーツマス日露講和条約の締結となった(明治38年・1905年9月5日)。爾来110年、今年はその節目の年に当たる。

顧みて、現下の我が国土領域周辺の状況、特に中韓の反日運動、両国の接近、北朝鮮問題、北方領土問題など、120年前の国内外の情勢を彷彿とさせるものがある。先人に学ぶべき点、我が国の自存自衛と伝統の保持について真剣に考える乙未の年でなければならぬ。この度の年越し詣では取り分け、その思いに駆られつつ家を出た。

靖國神社ほど参詣者を手厚く遇して下さる神社はないのではないか。特に年越し詣でに当たっては、寒さを凌ぐための種々の配慮がなされている。境内各所での、ボーイスカウト東京連盟の大勢の少年・少女達による庭燎(かがり火)奉仕、社頭における御神酒の振舞い、遊就館前における熱い甘酒の接待、終夜開館されている遊就館、参集殿内でのお茶の接待等々。勿論、外苑参道の両側には沢山の屋台が立ち並び、参詣者が一時の暖を取り、腹枵えをするには事欠かない。若者や家族連れにとつても楽しい年越し詣である。日本人の古里がそこにはある。そして、内苑に進み身を清めて神前に頭を垂れば、我々の先祖や先輩、同僚の御霊が手厚く祀られている。国のため命を捧げた人々の英魂が、自分の如何を問わず鄭重に祀られているのである。

地下鉄九段下駅を出て坂を登れば、やがて大鳥居が漆黒の空に、ライトを受けて巨人の如く聳え立つ。これより第二鳥居までの参道両側には、沢山の屋台が並び、食べ物臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、いずこも同じ年越し詣での景観である。だが、こまでは外苑、下乗札の立つ内苑神域に入れば、凜とした空気に包まれ、数百の参詣者が静かに開門を待つ。圧倒的に

若者が多く、筆者のような高齢者の姿はほとんど見当たらない。外国人の姿もかなり多い。歴史と伝統のある日本人の風習が、そして日本人の美しい心が、外国人の目にはどのように映っているのであらうか。

閉ざされた神門中央扉の十六重弁菊の大御紋章がライトを受けて金色に輝き、大鳳と大羽子板が左右の柱に飾られて、新しい年への門出を祝するかのようである。大手水舎の前で庭燎(かがり火)奉仕をするボーイスカウトの少年達の姿も凛々しく映える。

やがて零時30分前、一斉に開扉されると、ライトアップされた正面の拝殿が神々しく目に飛び込んでくる。一同肅々と拝殿前の鳥居付近まで進む。この日、大晦日の夜は、北西の寒風はやや強いものの、雨雲も無く、絶好の日和、漆黒の空を背景に拝殿の薨が聳え立ち、金色の御紋章がライトに映えて輝き、見事なコントラストをなしている。今日の拝殿は特別に紫の幔幕を廻らし、白く染め抜かれた十六重弁菊の大御紋章が目鮮やかである。

更にまた、今日は旧暦の11月10日、満月には5日ほど早い、流れる雲の間に間に上弦の月が、丁度、拝殿の薨の右上に、皓々と輝き、誠に幻想的な光景を呈している。その流れる白雲と





遊就館前 庭燎奉仕のボーイスカウト



全国神社奉納絵馬展



奉獻酒銘柄展

刀剣、なかんずく日本刀は、古来武士の魂とされ、武器としては勿論であるが、破邪の利剣とも言われて、正義、顕正の象徴とされ、神器としても尊崇されてきた。三種の神器の一つである天叢雲剣(後に草薙剣)は、その最たるものであろう。また、鎌倉時代の初め、後鳥羽院(上皇)(天皇御在位第82代一一八三〜一一九八年、上皇御院政一一九八〜一二二一年)が各地の刀鍛冶の名工25名を召されて仙洞御所で太刀を打たせられ、御自らも淬刃(刀身に刀紋を付ける工程)を試みられ、完成した太刀の茎に十六重弁菊花紋を銘に代えて刻まれたこと、

光り輝く月を見上げていると、何故か彼の「千の風になって」の歌を思い出し、大晦日の靖國の御社の上を、沢山の英霊の御霊が飛翔しておられるかのような錯覚を覚える。  
正零時、暗夜の静寂を破って拝殿の大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとうございます」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、柏手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達を中心ではあるが、真摯な参詣者の姿がそこにある。  
新年拝殿掲示の天皇陛下の御製は、「波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎へ祝はむ」とあり、

平成6年の歌会始の御題「波」を詠まれたものである。天皇陛下の御製には深い祈りや慈しみの御心が込められており、霊性とも霊力とも言うべき不思議な力、人々の心に深い感動を与える力を持っている。  
「新玉の年を迎へて靖國の御前に義見らと會へる喜び」(正能) 私事ながら小生の姉と妹の夫(共に故人)の兄たちは、若くして学徒出陣し、姉の方はニューギニア戦線で、妹の方は広島原爆で何れも戦死し、靖國神社に祀られている。また、妻の叔父もシベリア抑留中に病死して同じく靖國神

社に合祀されている。  
拝殿の右側には例年の如く伊勢絵馬協賛会から献上された大絵馬が掲げられている。今年は乙未の年、干支の未に因み、寄り添う羊の親子の絵が描かれた心温まる見事なものである。  
また、参集殿の前には、全国約三百三十余社の神宮・神社から奉納された絵馬が美しく飾られており、その中に懐かしい郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。また、全国靖國献酒会から奉納された三百余种の銘酒とそのラベルが飾られている。靖國神社に寄せる全国の神宮・神社の神官・神職及び神酒を醸造する杜氏達並びに善良な

る国民の崇敬心の篤さを思わせる。  
更に、境内各所で、庭燎奉仕をするボーイスカウト東京連盟の大勢の少年少女達や受付案内の事務奉仕をする崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の健気な姿に感動。このような日本人の心を受け継ぐ青少年のいる限り、未来への展望が開けるような気がする。  
参拝を終え、神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館で、特別展「奉納新春刀剣展」を拝観する。平成26年2月第99号のこの欄にも記載させていただいたが、この刀剣展に関連して、次の記事を再度掲載させていただくことにする。



靖國神社遊就館特別展

そして後に、この菊花紋が皇室（天皇家）の御紋章となったこと、また、後鳥羽院の作刀は「菊の御作」として今に伝えられていることは、周知のとおりであろう。

ところで、靖國神社の境内にも、かつては多くの刀匠を抱え、「靖國刀」と呼ばれる日本刀を鍛造する日本刀鍛錬會の鍛錬場があったことは余り知られていないので、境内奥の相撲場の南にある「行雲亭」（今は茶室に改造されている）の銘板からその由来を抜粋すると、次のとおりである。

「行雲亭は、陸軍省の建築課技師内藤太郎と柳井平八の設計により、昭和

八年六月二十五日（財）日本刀鍛錬會の鍛錬所として竣工された建物である。昭和六十二年九月に五つの鍛冶場の全てが茶室に改装されたが、外観は当時のままの優美な姿を残しており、特に屋根上の吹抜けは、鍛錬場に見られる様式で、行雲亭本来の姿を物語っている。（財）日本刀鍛錬會は、明治維新とともに衰退の一途をたどった鍛刀界の復興、国民の愛刀心の向上、そして有事に際した軍刀の整備などを目的に発会。理事長には歴代の陸軍次官があたり、延べ十一名の刀匠と二十一名の先手からなる刀工集団を中心に組織され、終戦までの間、八一〇〇振に及ぶ良質な日本刀を製作し続けた。そこで製作された日本刀は「靖國刀」、刀匠達は「靖國刀匠」と呼ばれ、当初の靖廣・靖徳・靖光をはじめ、陸軍大臣より「靖」の字を冠する匠銘を授与された。また、大正十五年頃には、日本古来のたたら製鉄は途絶え、日本刀の材料となる高品質の玉鋼の入手は困難な状態にあった。そこで、日本刀鍛錬會は、古代から良質の砂鉄を産出する島根県仁多郡横田町に「靖國鑛」を開設し、そこで生産された玉鋼は五十数トンに及んだ。

終戦を迎え、日本刀の製作は一時禁止されたが、昭和二十八年には再開。

### 『千の風になって』

日本語訳詞・作曲 新井 満

私のお墓の前で／泣かないでください  
そこに私はいません／死んでなんかいいません

私のお墓の前で／泣かないでください  
そこに私はいません／眠ってなんかいいません  
あの大らかな空を／吹きわたっています

あの大らかな空を／吹きわたっています  
あの大らかな空を／吹きわたっています  
あの大らかな空を／吹きわたっています

あの大らかな空を／吹きわたっています  
あの大らかな空を／吹きわたっています  
あの大らかな空を／吹きわたっています

秋には光になって／畑にふりそそぐ  
冬はダイヤのように／きらめく雪になる  
朝は鳥になって／あなたを目覚めさせる  
夜は星になって／あなたを見守る

## 千の風になって

I am a thousand winds

日本語詩 新井満 作曲新井満 原作詩(英語)者不明

1.わたし 2.あき

の おはかの 一ま えで なかないでくださ い  
は ひかりに 一な って はだけにふりそそ いく

そこに わたしは いません ねむってなんか いませ ん せん  
ふゆは ダイヤの ように 3. き らめくゆきにな る あざは  
C G Am F Em Dm G F/G (B1SS)...G...

か ぜ に せんのか ぜになっ て あ  
とりに なっ て あなたを めざめさせ る

の おおきな 一そ らを ふきわたって いま す  
よるは ほしにな 一っ て あなたを 一み まも

3. F G Am Dm G C F/C C  
す あ の おおきな 一そ らを ふきわたって いま す

また、中断していた鍮操業も、昭和五十二年には、靖國鐘の技術を継承し作刀技術の保存を目的とする(財)日本美術刀剣保存協会が「日刀保たたら」として復活させた。そこで生産された良質な玉鋼は、日本刀の材料としてだけでなく、茶の湯の釜や東大寺仁王像修復などにも広く用いられている。」

(飯田正能記)

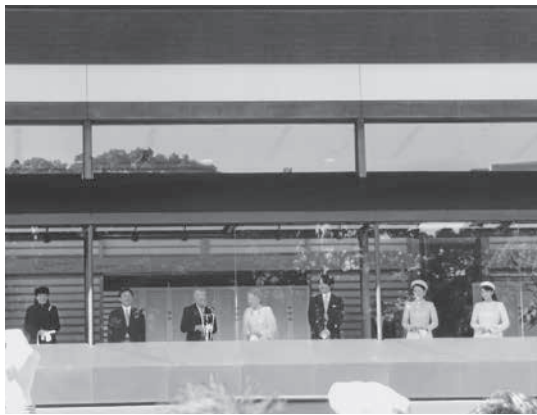
## 皇居参賀二題

例年のとおり、暮れと正月、二度の参賀に皇居を訪れた。12月23日の天皇誕生日と1月2日の一般参賀である。いづれも好天に恵まれて多くの人々が訪れた。

### ○天皇誕生日参賀

天皇陛下は平成26年12月23日、満81歳(半寿<sup>はんじゆ</sup>〓八十一寿)の御誕生日を迎えられた。誠に慶賀に堪えないところであり、心より聖寿万歳を祈念申し上げる。

陛下は、現憲法下で初めて即位された天皇として常に、象徴天皇の在り方を模索してこられ、国と国民のために、尽くすことが天皇の務めであるとして、国民と苦楽を共にすることを実践してこられた。平成元(1989)年1月9日の「即位後朝見の儀」において、「皆



さんとともに日本国憲法を守り、これに従って責務を果たすことを誓い、国運の一層の進展と世界の平和、人類福祉の増進を切に希望してやみません」と述べられた。また、大きな自然災害の際には、先ず被災した都道府県の知事にお見舞いを伝え、間もない時期に、現地を訪問されてきた。平成7(1995)年2月17日の阪神淡路大震災の時もそうであったし、平成23(2011)年3月11日の東日本大震災の際には、津波による犠牲者が増え続け、福島第一原発事故も重なった未曾有の大災害に、国も国民も大きく動揺している中、同月16日には、ビデオメッ

セージにより「被災した人々が決して希望を捨てることなく、明日からの日々を生き抜いてくれるよう、国民一人ひとりが被災した地域に長く心を寄せていくことを心より願っています」と語り掛けられた。被災者をいたわり、命懸けで救助や原発事故の収束に当たる関係者を労い、国民に苦難を分かち合うことを希望された。原発事故への対応などで政府への不信感も漂う中、このビデオメッセージにより勇気付けられた人は少なくなかった。そして、その後の被災地への両陛下並びに皇族方の御訪問はしばしば行われてきた。

天皇陛下はまた、皇太子時代から戦没者慰霊に御心を砕いてこられた。取り分け沖繩への思いは深く、計9回、沖繩県を訪問してこられた。最初の昭和50(1975)年には、ひめゆりの塔で火炎瓶を投げつけられる事件が起きたが、陛下の誠実な優しいお人柄が沖繩の人々の心を解かし、平成5(1993)年、天皇として初御訪問の際には、1500人の遺族に親しく慰めのお言葉を掛けられ、一同を感動させた。また、天皇、皇后両陛下は、平成6(1994)年2月硫黄島を、戦後60年に当たる平成17(2005)年6月にはサイパン島をそれぞれ御訪問になり、戦没者を慰霊された。

そして、今年(4月8日(水)〜9日(木))のパラオ諸島(ペリリュー島及びアンガウル島を含む)を御訪問になり、戦没者の慰霊を始め、南洋群島諸国の大統領らとの会談も予定されているという。南洋群島諸国は、第一次世界大戦前はドイツの植民地であったが、戦後日本が国際連盟の委任を受けて統治し、民生、教育に力を注ぎ、産業(燐鉱石、砂糖等)の育成を図ったところで、極めて親日的である。先の大東亜戦争においては、太平洋の絶対国防圏の要衝としてこれを守備する我が軍と米軍との間に壮絶なる死闘が繰り返された。取り分けペリリュー・アンガウル島の戦いは、精強を誇る米第一海兵師団を壊滅状態に追い込んだ、戦史に勇名を轟かせた戦いであった。更に御公務以外の宮中祭祀、伝統行事等も欠かさず、真摯に務められ、また、御公務の合間には、科学者としてハゼの研究にも熱心に取り組まれ、これまで、31編の論文を発表してこられた。天皇陛下が歩んで来られた81年の道のり、皇后陛下と共に御手を携えて歩んで来られた56年の道のりを振り返り、誠に有り難く、感激の他ない。さて当日は、朝から一点の曇もない正に天皇晴れとも言うべき絶好の日和となった。毎年の嘉例により皇居一般



参賀（午前中3回お出まし、午後は記帳のみ）に出掛けた。

今回は第2回のお出まし（11時頃）に間に合うようにと、地下鉄大手町駅から急いで皇居前広場に向かったが、既に検問所前は日の丸の小旗を持った参賀の人波で一杯であった。今年的一般参賀の人員は、昨年を上回り、記帳を含めて2万8933人に及んだという。若い人や家族連れが多く、特に外国人の多さが目立つ。我が国の皇室に対する敬愛の念は、今や国際的である。

しかも、内外を問わず、いずれの人の顔も晴れやかに見える。皇居の緑に参賀の人々が手にする日の丸の小旗が映えて美しい。やがて天皇、皇后両陛下を始め皇太子、同妃両殿下、秋篠宮、同妃両殿下、真子内親王殿下の七方が長和殿ベランダにお出ましになると、

宮殿前を埋める参賀の人々から一斉に万歳の声が上がリ、日の丸の小旗が打ち振られる。これに応えて両陛下並びに皇族方が御手を振られ、にこやかに会釈をされる。皇室と国民を結び付ける最も美しい光景である。

その後天皇陛下は、短い御言葉を賜るが、決まって国民の幸せを第一に祈念される。

陛下は、今年各地で相次いだ自然災害について触れられ、「決して安泰で

あったとは言えない1年が過ぎようとしています」と振り返られ、「皆さんにとつて来る年が明るい年となるよう願ってやみません」と述べられた。御言葉の最後には、大勢の参賀者に向けて「ありがとう」とお辞儀をされ、笑顔で御手を振られた。

被災者を思い、国民の幸せを願われる陛下の御心を込められた御言葉には深く感動した。国民と国家の象徴として努められる真に真摯で崇高な御姿である。

## ◇

参賀を終えて、皇居東御苑を経、北の丸公園を通り、靖國神社へ向かう。この日は、今上陛下のためたい御誕生日であると同時に、かの忌まわしい極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）の判決で、いわゆるA級戦犯として絞首刑を言い渡された（昭和23年11月12日）七士の方々（土肥原賢二、松井石根、東條英機、武藤章、板垣征四郎、廣田弘毅、木村兵太郎）が、巣鴨拘留所において処刑された日（昭和23年12月23日午前0時1分と0時20分）から66年目の命日（67回忌）でもある。いわゆる東京裁判は、昭和21年4月29日の昭和天皇御誕生日（天長節）に始まり（起訴）、当時皇太子殿下であられた今上陛下の御誕生日に終結（処刑）

するように仕組まれた。そして天皇のみならず、日本国民に永久に負い目を忘れることのないよう、東京裁判史観による洗脳を工作したのである。

靖國神社参拝を終えて、遊就館前の「ラダ・ビノード・パール博士顕彰碑」に参拝する。この日の顕彰碑には生花が供えられ、大勢の人々、特に若者達に碑前に佇んで熱心に碑文と靖國神社の元宮司故南部利昭氏が捧げた建立の「頌」に見入っていた。

この碑文と「頌」は、極東国際軍事裁判の不当性と同裁判所判事としてただ一人、全員無罪を主張したインド代表判事パール博士の崇高な使命感を端的に表している。パール博士が意見書の結語として示された「時が熱狂と偏見とをやわらげた暁には・・・」の詩文が、実は、アメリカにおける南北戦争終結後、南軍の捕虜收容所長ワーズ大尉が、北軍の捕虜虐待を命じたとして訴追され、北軍側の偏見に基づく裁判の結果処刑されたのを悼み、その処刑後43年を経て建立された記念碑の台座に、時のデビース大統領が、ワーズ大尉の冤罪を晴らすために書いて刻まれた彼の鎮魂歌であることを、吉本貞昭（本名中川聖）著『東京裁判を批判したマッカーサー元帥の謎と真実』（平成25年5月株ハート出版発行）に

よって初めて知ることができた。

## ◇

天皇陛下は、新年を迎えるに当たつての御感想を、宮内庁を通じて文書で発表された。御感想は、「戦後70年の節目の年を迎える当たり、先の戦争で戦場や原爆、空襲などで亡くなった人々は誠に多いものでした」とされた上で、「満洲事変に始まるこの戦争の歴史を十分に学び、今後の日本の在り方を考えていくことが、今、極めて大切なこと」と強調された。また、昨年大雪や大雨、御嶽山の噴火で家族や自宅をなくした人々や、今も避難生活を続ける東日本大震災の被災者を心配されている。そして、新しい年に当たり、「国民皆が苦しい人々の荷を少しでも分かち持つ気持ちを見失わず、世界の人々とも相携え、平和を求め、良き未来を築くために力を尽くしていくよう願っています」と綴られた。

天皇、皇后両陛下は今年、1月に阪神大震災20年で神戸市を、5月に全国植樹祭で石川県を、9月に国体が開かれる和歌山県を、10月は全国豊かな海づくり大会のために富山県を訪問される予定である。

秋篠宮、同妃両殿下は、6月29日に銀婚式（結婚25年）を迎えられ、次女の佳子女王殿下は今春、国際基督教大

学に入学される。

三笠宮崇仁親王殿下には、今年12月2日の御誕生日で満百歳となられる。

◇

○天皇、皇后両陛下が平成26年にお詠みになられた御歌(宮内庁発表)

天皇陛下御製(3首)

〈神宮参拝〉

あまたなる人らの支へ思ひつつ

白木の牙ゆる新宮に詣づ

〈来たたる年が原子爆弾による被災より

七十年経つを思ひて〉

爆心地の碑に白菊を供へたり

忘れざらめや往にし彼の日を

〈広島市の被災地を訪れて〉

いかばかり水流は強くありしならむ

木々なき倒されし一すぢの道

皇后陛下御歌(3首)

〈ソチ五輪〉

「己が日」を持ち得ざりしも数多あり

て ソチ・オリピック後半に入る

〈宜仁親王薨去〉

み嘆きはいかありしならむ父宮は

皇子の御肩に触れまししとふ

〈学童疎開船対馬丸〉

我もまた近き齢にありしかば

沁みて悲しく対馬丸思ふ

◇

更に天皇陛下は12月29日、全国植樹

祭と国体、全国豊かな海づくり大会の

3行事について読まれた歌を、各行事が開催された3県に宮内庁を通じて伝えられた。

◇

◇第65回全国植樹祭(新潟県、6月1日)

十年前地震襲ひたる地を訪ね

ぶなの苗植う人らと共に

◇第69回国民体育大会(長崎県、10月12〜22日)

台風の近づきて来る競技場

入り来たる選手の姿たのもし

◇第34回全国豊かな海づくり大会(奈良県、11月15、16日)

若きあまごも卵もつあゆを放ちけり

山間深き青き湖辺に

◇

○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、日本晴

れ、正に参賀日和である。1月2日は

筆者の誕生日でもあって、家族共々朝

早めの祝い膳を頂いて家を出た。

新年参賀はさすがに規模が大きい、

宮殿長和殿ベランダへの天皇・皇后両

陛下始め皇族方の御出御は、午前3回

(10時10分頃、11時頃、11時50分頃)

午後2回(1時30分頃、2時20分頃)

計5回行われる予定であるが、通常、

皇族方の御出御は午前中1〜2回目

が

一番多い。皇居外苑では、馬場先門、

和田倉門、桜田門の三方向から進ん

きた参賀の人波を各検問所で検査をし

た後、警官の誘導に従い石橋を渡って

正門から入り、鉄橋(二重橋)を渡つ

て宮殿長和殿前の広場に至る。いずれ

も長蛇の列である。早めにとまって家

を出たが、地下鉄駅から検問所まで約

20分、検問所から正門石橋前まで約20

分、そこから更に広場まで約20分と約

1時間を要したため、第1回の御出御

(10時10分頃)に間に合わず、第2回

目(11時頃)まで約30分待つことになっ

た。

およそ2万人を収容できるという長

和殿前の広場は、手に手に日の丸の小

旗を持った参賀の人々で忽ち一杯に

なった。やはり若者が圧倒的に多く、

華やかな雰囲気満ちている。外国人

も非常に多い。観光ツアーと思われる

団体も多い。喜ばしいことである。参

賀は日本の伝統文化でもあるからだ。

やがて定刻、天皇、皇后両陛下を先

頭に、皇太子、同妃両殿下、秋篠宮、

同妃両殿下ほか皇族方が御出御になら

れると、一斉に日の丸の小旗が打ち振

られ、天皇陛下万歳の歓声が上がリ、

両陛下と皇族方がお手を振ってにこや

かに応えられた。この日の皇族方は、

皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両

殿下、眞子内親王殿下、佳子内親王殿

下、常陸宮、同妃両殿下、三笠宮殿下、

寛仁親王妃信子殿下、彬子女王殿下、

高円宮久子妃殿下、承子女王殿下の13

方に両陛下合わせて15方という、誠に

豪華な、華やいだ感じのする御出御で

あり、取り分け昨年12月29日に20歳の

成人を迎えられたばかりの佳子内親王

殿下は、初めてのご参列であり、留学

先の英国から一時御帰国中の眞子内親

王殿下と共に、にこやかに手を振られ

ていた。皇室の方々の健やかなお姿を

拝し、誠に喜ばしい限りであった。

天皇陛下は、「・・・本年が国民一

人びとにとり、安らかな、穏やかな

ものであることを願っています。年の

初めにあたり、我が国と世界の人々の

安寧と幸せを祈ります」とのお言葉を

賜った。

過重な御公務の中にあつて絶えず国

民の上に思いを寄せられる、誠実で優

しい陛下の大御心に感動させられた。

今年の一般参賀の参賀者数は、平成

に入つて3番目に多い8万1030人

に達したという。

身も心も清められ、晴れ晴れとした

思いで宮殿前広場を後にした。

(飯田正能記)

### ○平成27年「宮中歌会始」の御儀

新春恒例の「宮中歌会始」の御儀が

1月14日午前、皇居正殿「松の間」において、古式に則り厳かに行われた。

今年の御題は「本」で、天皇、皇后両陛下の御製・御歌、皇族方のお歌、天皇陛下に招かれて歌を詠む召人（今年

は短歌結社「水甕」代表の歌人春日真木子さん88歳）の歌と選者の歌、

2万861首の応募作の中から選ばれた選歌10首（今年の最年少は神奈川県

の小林理央さん15歳、最年長は奈良県の伊藤嘉啓さん78歳）が、天皇陛下の御前で披講された。

天皇陛下の御製は、毎年陛下は、春には種籾を撒かれ、初夏には田植え、

秋には稲刈りをされ、収穫された新米の一部を伊勢神宮の神嘗祭に供えられ

るが、その秋の稲刈りの様子を詠まれたものであり、皇后陛下の御歌は、過

去幾度となく本から安らぎをもらい、それが木陰で憩うようであったことを

思い起こされて、本への親しみや感謝のお気持ち詠まれたものである。

来年の御題は「人」である。



#### 天皇陛下御製

夕やみのせまる田に入り捻りたる

稲の根本に鎌をあてがふ

皇后陛下御歌  
来し方に本とふ文の林ありて  
その下陰に幾度いこひし

皇太子徳仁親王殿下お歌

山あひの紅葉深まる学び舎に  
本読み聞かす声はさやけし

皇太子妃雅子殿下お歌

恩師より贈られし本ひもとけば  
若き学びの日々のなつかし

秋篠宮文仁親王殿下お歌

年久しく風月の移ろひ見続けし  
一本巨樹に思ひ巡らす

秋篠宮妃紀子殿下お歌

日系の若人かたりぬ日本への  
あつき思ひと移民の暮らしを

秋篠宮眞子内親王殿下お歌

呼びかける声に気づかず一心に  
本を読みたる幼きわが日

秋篠宮佳子内親王殿下お歌

弟に本読み聞かせぬる夜は  
旅する母を思ひてねむる

常陸宮妃華子殿下お歌

新しき本の頁をめくりつつ  
いづく迄読まむと時は過ぎゆく

三笠宮寛仁親王妃信子殿下お歌

松山に集ひし多くの若人の  
抱へる本は夢のあかしへ

三笠宮彬子女王殿下お歌

数多ある考古学の本に囲まれて  
積み重なりし年月思ふ

高円宮妃久子殿下お歌

来客の知らせ来たりてゆつくりと  
読みさしの本に葉入れたり

高円宮承子女王殿下お歌

霧立ちて紅葉の燃ゆる大池に  
鳥の音響く日本の秋は



召人 春日真木子

緑陰に本を繰りつつわが呼吸と  
辛くあひあふ万の言の葉

選者 篠 弘

送られし古本市のカタログに  
一冊を選ぶが慣ひとなりぬ

選者 三枝 昂之

音読の声が生まれる一限目  
明日へ遠くへ本がいざなふ

選者 永田 和宏

本棚の一段分にをさまりし  
一生の量をかなしみにけり

選者 今野 寿美

秋の気の音なく満ちて指先に  
起こしては繰る本こそが本

選者 内藤 明

開かれて卓上にある一冊の  
本を囲みて夕餼のごとし

○選歌（詠進歌10首、年齢順）

奈良県 伊藤 嘉啓 (78)

若き日に和本漁りぬ京の町

目方で買ひし春の店先

新潟県 吉楽 正雄 (77)

おさがりの本を持つ子はもたぬ子に  
見せて戦後の授業はじまる

愛知県 森 明美 (74)

竹垣の露地に仕立てた数本の  
太蘭ゆらして風わたりけり

長野県 木下瑜美子 (72)

大雪を片寄せ片寄せ一本の  
道を開けたり世と繋がりぬ

千葉県 平井 敬子 (59)

「あつたよねこの本うちに」流された  
家の子が言ふ移動図書館

埼玉県 森中 香織 (58)

本棚に百科事典の揃ひし日に  
父の戦後は不意に終はりぬ

茨城県 五十嵐裕治 (57)

二人して荷解き終へた新居には  
同じ二冊が並ぶ本棚

神奈川県 古川 文良 (46)

雉さんのあたりで遠のく母の声  
いつも渡れぬ鬼のすむ島

岡山県 中川真望子 (17)

暑い夏坂を下ればあの本の  
あの子みたいに君はあるのか

神奈川県 小林 理央 (15)

この本に全てがつまつてる  
わけぢやない

だから私が続きを生きる



# ペ島のサクラ

陸士61期 飯田 正能

「発信地 ペリリユー

発信者 歩二長発信時刻

11月22日07時40分

受信者 高級副官宛

歩二電第一七七號

通信断絶ノ顧慮大トナレルヲ以テ最後ノ電報ハ左ノ如ク致シ度承知相成度

左記

一、軍旗ヲ完全ニ處置シ奉レリ

二、機秘密書類ハ異状ナク處理セリ

右ノ場合「サクラ」ヲ連送スルニ付報

告相成度 終」

右の電文は、昭和19年11月22日に、ペリリユー島地区守備隊長中川州男大佐（水戸・歩兵第二聯隊長・戦死後中将・陸士30期）が、パラオ本島の第十四師団（師団長井上貞衛中将・陸士20期）高級副官橋本津軽少佐宛に送った至急電（原文のまま）である。

ペリリユー島守備隊は、昭和19年9月15日の米軍上陸以来、死闘を続けること2ヵ月余、熾烈な砲爆撃に耐え、食糧、彈薬の枯渇を凌ぎつつ、決死の斬込みを続け、敵に甚大なる損傷と脅威を与えた。その間500通以上の詳

細な戦闘報告・戦訓等の暗号電をパラオ集団司令部宛に送っており、更に、敵前逆上陸に成功し、その後の戦闘に勇戦敢闘した歩兵第十五聯隊（高崎）第二大隊（長・飯田義榮少佐・陸士46期）の戦闘詳報・戦訓等を奈良四郎少尉らによる決死の海中遊泳60キロの難行の末、パラオ集団司令部他に届ける等、冷静にして正確な觀察による多大な情報をもたらし、その後の戦闘指導に大きく貢献した。

そして、11月22日、優勢な敵が大山坳点の主陣地中核に迫ってきたため、中川地区隊長は戦況の急変を憂慮し、また、送信のための乾電池も底をついたため、パラオ集団司令部宛に玉砕の際の電文を「サクラ サクラ」と連送することの了承を求めたものである。

その後11月24日、戦況ますます緊迫化し、10時30分、中川大佐は、パラオ集団参謀長多田督知大佐（陸士36期）宛に「敵ハ二十二日以来、我が大山主陣地中核ニ浸入、昨二十三日、各陣地ニ於テ激戦シツツアリ、本二十四日以降、特ニ状況カラ見テ陣地保持ハ困難ニ至ル。地区隊現有兵力、健在者約五十名、重軽傷者七十名、計百二十名、兵器ハ小銃ノミ、同彈藥約二十発、手榴彈、糧秣オオムネ二十日以降皆無、地区隊ハ本二十四日以降、統一セル戦

闘ヲウチキリ、残ル健在者約五十名ヲ以テ、遊撃戦闘ニ移行、砲クマデ持久ニ徹シ、米奴撃滅ニ邁進セシム。重軽傷者中、戦闘行動不能ナル者ハ自決セシム。重傷者中約四十名ハ、目下戦闘中ニシテ依然主陣地ノ一部ヲ死守セシム。將兵一同、聖寿ノ万才ヲ三唱、皇運ノ弥栄ヲ祈願シタテマツリ、集団ノ益々ノ發展ヲ祈ル」との至急電を打電し、16時、大山戦闘指揮所の洞窟で、軍旗を奉焼し、機秘密書類を焼却。続いてパラオ集団長（第十四師団長）宛最後の電文を打電した。

「サクラ サクラ」

パラオ本島通信部に、その痛恨の思いを込めたペリリユー島守備隊玉砕を伝える電文が届いた時、その電文を見た者、等しく泣かずにはおられなかつたという。

この最後の電文を送った後、守備隊長中川大佐と、第14師団から派遣された、築城と戦闘指導に当たっていた師団司令部付幕僚村井權治郎少将及び第十五聯第二大隊長飯田少佐の3名は、古式に則り従容として割腹自決し、重傷者たちも後を追って自決した。

後に残された根本甲子郎大尉以下傷だらけの將兵56名は、最後の決死隊を組織し、大山の司令部洞窟陣地を出て遊撃戦に移行した。同11月24日18時、

パラオ本島へ打電した次の電文を最後に通信は途絶えた。

「十八時ヨリ遊撃戦ニ移行ス

根本大尉以下五六名一七組、二十四

日一七〇〇、編成完了。主トシテ敵幹

部及ビ兵員ヲ随所ニ奇襲シ、以テ地区

隊長ノ遺志ヲ繼承シ持久ニ徹シ、集団

司令官閣下ノ御意図ニ副ワン。

遊撃隊員ハ一同、士氣旺盛、鬪魂ヲ

燃シ、神出鬼没、敵ノ心胆ヲ寒カラシ

ム。夜鬼トナリ、之ガ粉殺ヲ期セント

ス。

通信断絶ノ為本日以降連絡期シ難キ

モ、御諒解ヲ乞ウ。

最後ハ何等カノ方法ヲ以テ報告致

度」

米軍公刊戦史は、この時の状況を次のように述べている。

「米歩兵第八十一師団（第三二二連隊欠）は十一月二十五日、包圍圈を圧縮し、同二十七日七時、大山全地区の掃蕩戦攻撃を開始、同日十一時、第三二二連隊長ワトソン大佐は第八十一師団長ミューラー少将に作戦終了を報告した。なお、米海兵隊公刊戦史によれば、遊撃隊根本甲子郎大尉以下五十六名十七組は、米軍の包圍圈を突破できず、二十四日の夜から二十七日七時頃までの間に、米軍と激しく交戦、全員玉砕した」と。



ペリリユー神社境内に建立されているニミッツの詩碑・碑の両面に和文・英文で刻まれている

この小さな島(南北約9キロ、東西約3キロの珊瑚礁の島で、中央高地は高さ約80メートル)で練り広げられた戦闘は、グアム島、サイパン島にまさる激しいもので、太平洋戦史上に特筆すべき戦歴を残している。同じバラオ諸島の近くの島アンガウル島戦と並んで、その壮絶さは世界戦史上初めての例であるとも言われている。その恐怖は米軍戦史にも明らかであり、米軍は「これほど高価な代償を払ってまで占領しなければならなかったのか」と述懐しているくらいである。

中でも「天山死守」を命じられた第二聯隊第二大隊の一部(山口永少尉以下22名)と、海軍の生存者12名計34名が最後に降伏したのは、終戦の時から約1年9ヵ月経った昭和22年4月であった。彼らは守備隊の遺志を引き継ぎ、持久に徹し、ゲリラとなって米軍を悩まし続けたのである。「祖国の防壁となれ」という合言葉の下に、ペリリユー島、アンガウル島を守った兵士たちは、故国の家族に敵を近付けるなという純真一途な気持ちで、一命を擲ったのであった。

この壮絶なる戦闘に対し、昭和天皇から11回にわたって御嘉尚の電文が寄せられ、米軍はペリリユー島を「天皇の島」と名づけた。

米太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥は、自著『太平洋海戦史』の中で、ペリリユー戦について、「ペリリユーの複雑極まる防備に打ち勝つには、米国の歴史における他のどんな上陸作戦にも見られなかった最高の戦闘損害比率(約40%)を甘受しなければならなかった。既に制海権、制空権

を持っていた米軍が、死傷者合わせて一万人を超える犠牲者を出してこの島を占領したことは、今もって疑問である」と書いており、また、現在ペリリユー神社境内にある詩碑には、「諸国から訪れる旅人たちよ、この島を守るために日本軍人が、いかに勇敢な愛国心を持って戦い、そして玉砕したかを伝えられよ―太平洋艦隊司令長官 C. W. ニミッツ」と和・英両文で刻まれている。

戦闘が終わると、バラオの人々は泣く泣く日本兵士の遺体を埋葬した。彼らはその後も「サクラ・サクラ」の最後の電文を忘れられなかった。現地の女酋長の沖山豊美さん(日本名。父は日本人)は、「ペ島の桜を讃える歌」と題する歌詞を作り、小学校長のウェンティンさんが作曲した。八番まで続くこの歌は、今でもバラオで愛唱されている(歌詞は後掲)。また、この曲のほかに日本でもよく知られている歌に「酋長の娘」「バラオ恋しや」などがあり、日本とパラオ両国民の心の交流を示している。

「ペ島の桜を讃える歌」

作詞 オキヤマ・トヨミ

作曲 トンミー・ウエンティン

一 激しく弾雨が降り注ぎ血で染めた強兵たちは皆散つて  
二 小さな異国の墓となるこの島を誓いつつ  
三 山なす敵を迎え撃ち  
四 日本は散る春日ちど  
五 見事に咲いて明日は散る  
六 ペ島の桜は散り散りに  
七 玉砕れども武勲は永久に  
八 戦友遺族の永くは  
九 必ず我等は待ち望む  
十 桜とともに皆さまを

そればかりではない。バラオにも桜を植えたいとして、日本から桜の苗木を持っていったが、熱帯のため育たなかった。今は桜に似た花を「南洋ザクラ」と称して「国花」のようにしている。



# 平成27年度顕彰会初詣で

評議員 及川 昌彦

平成27年1月7日(水)、当顕彰会の年度当初の慰霊・顕彰活動として、初詣でを実施した。

まず、13時30分、靖国神社拝殿鳥居前に集合し、全員揃って参拝後、電車とバスを乗り継いで移動し、世田谷の駒繫神社こまづなぎに参拝した。澤田浩治ひろはる宮司による真心の籠もった新年の祝詞を厳粛な気持ちで拝承し、代表の藤田幸生副理事長の玉串奉奠に合わせて、一同拝礼した後、御神酒を頂戴した。



駒繫神社拝殿前にて

その後、徒歩で世田谷山観音寺に移動し、特攻観音堂内において、当顕彰会の評議員でもある太田兼照和尚による『特攻平和観音経』の読経に合わせ、心新たに戦没特攻隊員への慰霊の祈りを捧げた。兼照和尚の読経は、初めて拝聴する者もいたが、御父上の大和尚太田賢照山主の読経とはまた違った趣があり、迫力のある声量に圧倒される思いであった。



世田谷山観音寺・特攻観音堂前にて

その後、一同代官屋敷に移動して直会が行われたが、最初に、兼照和尚から年の初めに相応しい初詣でに関する御講話を拝聴し、次いで、観音寺秘蔵の「同期の桜」や「二重橋」など珍しいお酒が振る舞われた。一同美酒を楽しみつつ、今年の決意等々を語り合い、楽しいながらも、有益な一時を過ごすことができた。

大阪護国神社  
「特攻勇士慰霊祭」に参列して  
理事 小倉 利之

今年の初詣として、当顕彰会関係の神社・仏閣巡りにより、参加者一同心を清められ、慰霊・顕彰活動への決意を新たにすることができた。

参加者は、藤田幸生副理事長、衣笠陽雄専務理事、小倉利之・水町博勝・笹幸恵の各理事、羽瀨徹也理事兼事務局長、倉形桃代・石井千春・太田兼照・長瀬彰孝・大穂園井・及川昌彦の各評議員、大穂孝子顧問、原知崇・河島慶明各全体委員会委員、金子敬志事務局次長の16名であった。

平成26年10月26日(日)、大阪護国神社において、特攻勇士顕彰会(会長 一皓近畿偕行会会長)主催による第6回特攻勇士慰霊祭が斎行され、当顕彰会代表として参列しましたので、その概要を報告します。

当日は、一片の雲もない秋晴れの天候に恵まれ、慰霊祭は、本殿東側に建立されている「特攻勇士之像」の前に祭壇を設け、御遺族、御来賓、戦友他90余名が参列して斎行された。

式典は、11時頃から、神官入場の後、小野寺正芳事務局長の司会と開式の辞で開始され、国歌斉唱、黙祷、修祓の儀、降神の儀、献饌、祝詞奏上、祭文奏上、玉串奉奠、撤饌、昇神の儀、神官退場、伊丹駐屯地の陸上自衛隊音楽隊による慰霊鎮魂曲の演奏、祭電・メッセージ披露、閉式の辞と、式次第のつと、厳粛かつ整齐と執り行われた。

式典は、11時頃から、神官入場の後、小野寺正芳事務局長の司会と開式の辞

「本日、ここ大阪護国神社のこの聖地に、ご遺族・戦友のご出席とご来賓のご臨席を賜り、第六回の特攻勇士の慰霊・顕彰を挙げるに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。全国の護国神社に『特攻勇士之像』を建立し、それぞれの都道府県で特攻に身を捧げられた特別攻撃隊戦没者の崇高な精神と行為を日本国民の一人一人が永久に肝に銘じて伝承し続けることを願って制作されましたCD『あ、特攻』を発売された、大阪芸術大学の学生・教官を中心とする「日本人の心を伝える会」が発端となり、「特攻隊戦没者慰霊顕彰会」の重要事業として『特攻勇士之像』を全国の護国神社に建立する運動が展開されております。ここ大阪護国神社において、平成二十一年一〇月二四日に除幕式を致しました碑は、「崇高なる心で、ただ一筋に愛するものを守るため、『特攻』に



身を捧げた若者達、俺達が死んで日本を守る遙かな雲の彼方に、深い海底の墓標に今も眠る『特攻の戦士』の「御霊」をお迎えする「慰霊碑」を建て、いつまでも感謝の真心を捧げ、語り合いたいのです」とあります。

ここ大阪護国神社には大阪府下の特攻戦士五二五柱と、特攻同様の精神で戦われしました石頭予備士官学校生徒一三柱の計五二八柱が祀られております。

我が国の戦後における奇跡の復興と発展は、戦友・朋友・同輩の必死の努力により、成し遂げられました。今日、我が国、我が国民は、世界でも屈指の豊かで平和な生活を享受しております。また、アジアの諸民族は、それぞれ独立して目覚ましい発展を遂げております。この平和と繁栄の現在こそ、皆様方の滅私の献身が礎となって築かれたものであることを私達は決して忘れることはできません。

しかしながら、平和と繁栄が続く歳月の経過の中で、いつしか皆様方に対する感謝と慰霊の心が風化しつつあることが憂慮されます。その中であつて、突如生じた東日本大震災は天が与えた試練でありました。震災後三年を経過した今も復興は遅々として進まない状況ではありますが、被災された方々の、世界中の人々を驚嘆させた礼儀正しい

行動と自衛官を始めとする素晴らしい支援活動により、漸く本来の日本人としての自覚に目覚めたのであります。

慰霊行事は、この国のために一身をなげうたれたご英霊の皆様は哀悼の誠を捧げるものであることは当然であります。更に重要な事は、神となり仏となられた皆様に、現世の有様を満足して見て頂けるか否かを推し量り、現世に生きる者が自戒・自励の原点に立つところにあります。このような観点から見た時、二〇歳前後で散つて逝かれた皆様が、夢に描いたであろう、誇り高く、香り高く世界に感動を与え得る国家を目指して我々は一層の努力と精進に励まなければなりません。

近年において、北方領土、竹島、尖閣諸島といった我が国固有の領土への周辺諸国の侵害の問題、南京大虐殺や慰安婦の問題等への対応は長年の平和国家の虚名から脱しきれないまま、毅然たる態度に乏しく、宥和的姿勢に終始しております。これこそ、独立国家としての矜持、民族の誇りとしての観点から、憂うべき問題であります。

かつて、この国のために一身をなげうたれたご英霊の心情を思う時、誠に申し訳なく、ご意志を引き継いだ世代の我々一同、今こそ初心に帰つて、この国の有様を見直し、立て直さなければ

ばならぬ時期に來ていると考えます。

ここで、最も大切なのは日本国を主導する政府の方針と行動力であります。二年前に復活した自民党安倍政権は国民の高い支持率をバックに経済の復活と共に「自らの国は自らの手で守るんだ」の精神を基に安全保障政策、憲法改正を視野に取り組もうとしております。大いに期待したいものです。

この特攻勇士の碑前に参集しました私どもは、皆様の万感の念に思いを馳せるとともに、この世の流れは非情にして、これまで皆様を弔い、誠意を尽くして來られたご遺族・戦友・同輩の方々も、年と共にその数を減らしてまいりましたが、しかし、皆様の尊い犠牲をテーマにした百田直樹氏の『永遠の0』が空前のヒット作となりましたように、まだまだこの社会には、皆様を悼む心が健在しております。

また、最近の出来事ですが、皆様が出撃前に認められました手記が、心ある教師により、義務教育の学校現場で德育教材として採用され、生徒達に深い感銘を与えております。漸く、徐々にではありますがありますが、日本国民は本来の世界に誇れる美德を取り戻しつつあります。

終わりに臨み、本日ご参集いただきました皆様と共に、英霊の皆様が夢に描かれた美しい社会像・国家像に今一

度想いを致し、ご英霊に哀悼の念と感謝の誠を捧げ、安らかなお眠りを希つて追悼の詞と致します。

「神事の後の陸上自衛隊音楽隊による演奏は、陸海軍の皆様は良く知られている曲目で、御霊のために心を込めて吹奏された素晴らしい演奏であつた。

「特攻勇士之像」の前での儀式は、整齐と執り行われ、その後、護国神社本殿の西側にある「儀式殿」に移動して直会が行われた。会場が狭いために人数に制限があり、50名程度の各会代表者の集まりであつたが、加賀本昭雄氏の司会により、多くの方々が発言されたが、いずれも、特攻隊の真の姿を、「特攻勇士之像」を通じて、これからの日本人に如何に伝えていくかが、我々に課せられた責務であるとの認識に立つて真剣に話しておられたことが印象に残つた。「特攻勇士之像」がしっかりと守られて、将来においてもこれが継承されていくには、その組織の大切さを強く訴える方もあり、また、各都道府県の護国神社での慰霊祭についても、横の連携の大切さを訴える方もおられた。そして、ここに集まった人々のより一層の努力と意識向上が必要であることを話し合った会合であつた。

戦後70年が経過しようとしている中においても、このように真剣に取り組

んでいる姿を見て、我々も戦後の人達も、世代交代が如何に進もうとも、重要なことは、真の日本人の精神がしっかりと受け継がれ、若い人々の心にも植え付けられることが大切であり、それこそが、特攻隊員等に対する慰霊と顕彰になるものと信じている。

ここでの直会は、他の会合にはない素晴らしい意見交換会であり、感動させられた。

〔付記〕  
○「特攻勇士之像」の現状と将来の姿について

1 今までの流れに関する事

当顕彰会は、平成5年に、基本財産1億円で財団法人化（財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会）されました。

平成19年度においても繰越金のうち1500万円を基本財産に繰り入れる予算を計上しましたが、これを「特攻勇士之像」奉納運動基金に振り替えることの可否について、所管の厚生労働省に質しましたところ、他の事業と明確に区分して管理されるならば、差し支えないとの意向が示されました。そこで急遽、方針を変更することに、理事会・評議員会で決定いたしました。

会長から、全国52の護国神社宮司にこの旨の報告と協力をお願いする書状を発送いたしました。

靖国神社からは、護国神社それぞれ事情から、受入れに必ずしも積極的でないところもある、とのことでしたが、本運動を進めることについては、全面的に靖国神社のご指導とご協力を仰いでおります。

同年春の全国護国神社会同の席上、靖国神社から、像の奉納運動について当顕彰会の新方針の説明が行われた際、その場で、栃木、茨城、山梨、大阪、山口の5県の護国神社の宮司から受入れの意向が示されました。

今までに建立奉納された護国神社は、平成19年度に鹿児島県、福井県、宮城県、3護国神社、平成20年度に愛媛県護国神社、平成21年度に群馬県、大阪府の2護国神社、平成22年度に栃木県護国神社、平成23年度に千葉県護国神社、平成24年度に京都府（霊山）と福岡県の2護国神社、平成25年度に埼玉県護国神社、平成26年度に大分県護国神社の計12社、12体であります。その他に世田谷山観音寺と秋田護国神社内の建設が困難な事情から能代市の八幡神社に各1体ずつ、計2体、合計14体が建立奉納されています。なお、現在は、茨城県、山梨県、山口県他の各護国神社との話し合いが進んでおります。

2 「特攻勇士之像」の問い掛けるもの  
当顕彰会は、特攻の史実と精神を後

世に継承していくために、『特別攻撃隊全史』を刊行していますが、後世に特攻の全貌を伝えるものとして、本書の右に出るものはないものと考えますが、内容が学術書であり、広く一般的に、人々に読まれないであろうことは、止むを得ないものと思います。

また、当顕彰会では、春の靖国神社での特攻隊合同慰霊祭及び秋の世田谷山観音寺での特攻平和観音年次法要を執り行っておりますが、その時の参列者には、特攻隊勇士の志、日本人の精神というものは、感動をもって伝えられますが、一方、全国の護国神社の境内に「特攻勇士之像」が建立されるならば、像は無言のうちに「特攻とは」を、永久に人々に問い掛けて下さいます。

千葉県護国神社の宮司様からお話を聞く機会がありました。若い人達から「特攻勇士之像」の前で、「私達は何も知りませんでした。特攻のお話を聞きたい」とのことがよくあるとのことでした。

「特攻」という史実、その行為の基になった「日本人の心」は、これからも、平和な時代に生きる我々にとって想像もできない時代、その中で隊員達は、日本国民・愛する家族や愛する人を想い、死を目前にして、最後に残した特攻勇士たちの言葉、その遺志を忘れてはな

らない。また、その「日本人の心」を心として語り継ぎ、日本の平和を願いつつ亡くなられた特攻勇士たちのご冥福を祈るとともに、これを後世に伝えることを忘れてはならないと思います。

「特攻勇士之像」は、平成19年度に建立が始まってから、現在は14体ということですが、全国52箇所にある護国神社に、可能な限り早期に建立できるよう努力が必要であると思います。

また、現在の14体に関して、建立の主体となった組織を調査した結果、偕行社、郷友会、水交会、隊友会、つばさ会、自衛隊父兄会、英霊にこたえる会等が主として活躍されています。

建立された像について、その後慰霊祭を執り行っているかどうかその維持管理組織は、各護国神社の状況及び管理組織によって、毎年実施している所と、そうでない所がありますが、可能な限り、慰霊顕彰の面から、毎年執り行つて頂くことが大切だと考えております。

いろいろ述べてまいりましたが、旧軍関係者の活躍されている間に、一体でも多くの「特攻勇士之像」が、全国の護国神社に建立されるよう、ご尽力を賜りたいと心からお願ひ申し上げます。特攻隊戦没者慰霊顕彰会では、全力でご支援をしたいと考えておりますので、よろしくお願ひいたします。



## 平成26年度原町飛行場関係 戦没者慰霊祭に参列して

専務理事 衣笠 陽雄

平成26年10月12日(日)、福島県南相馬市原町区陣ヶ崎公園墓地内「原町飛行場慰霊碑」前において、原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会(事務局長高橋正彦氏)主催による「第44回原町飛行場関係戦没者(三三四柱)慰霊祭並びに第36回大東亜戦争原町関係戦没者(四六五柱)慰霊祭」が執り行われ、当顕彰会代表として参列しましたので、以下のとおり報告します。

### 一 慰霊祭の概要

式の開始前、高橋事務局長から東日本大震災時の当地域の被害、特に福島第一原発の放射能汚染の復旧遅延のため、残念ながら昨年同様、地元有志による小規模での開催となった経緯等の説明と挨拶があった(後記)。

それでも祭式には約50名の参列者があり、1時間半に亘って整齊と、かつ厳かに執り行われた。式は慰霊像並びに戦没者名を刻んだ左右の副碑の前に祭壇を設けて斎行された。

中央の主碑は、銚田教導飛行師団原町飛行隊当時、昭和19年11月、陸軍特

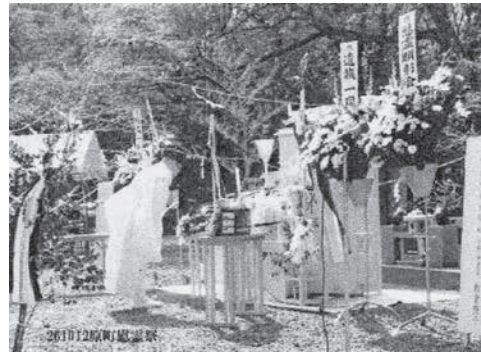
別攻撃隊鉄心隊隊長として比島に出撃した、松井浩中尉(陸士56期)が11名の隊員を率いて出発した時の写真から作成された、等身大のブロンズ像である。像は飛行機の翼をイメージし、地元彫刻家佐々木光男氏が制作された全国でも珍しい形の碑である。台座の碑文は元東大教授平泉澄氏の撰による。左側の副碑は原町飛行場関係全戦没者の銘盤であり、当顕彰会の山本卓眞前会長の兄上で、昭和19年12月7日、比島オルモック湾の敵艦船群に特攻突入して散華された、勤皇隊山本卓美隊長(陸士56期)の銘も刻まれている。右側の副碑は、「大東亜戦争原町関係戦没者」の銘盤であり、大東亜戦争で戦没された地元原町の御英霊も合祀し



慰霊碑 (右主碑・左副碑)

て欲しいとの要望に応え、昭和55年に建立されたものである。

祭式は、国歌斉唱、開式の言葉、黙祷の後、斎主である地元南相馬市鹿島

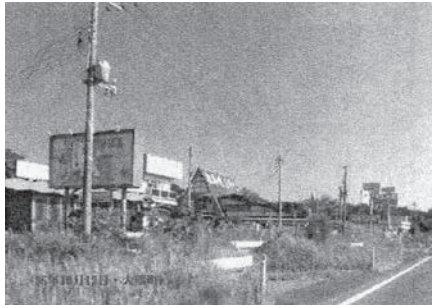
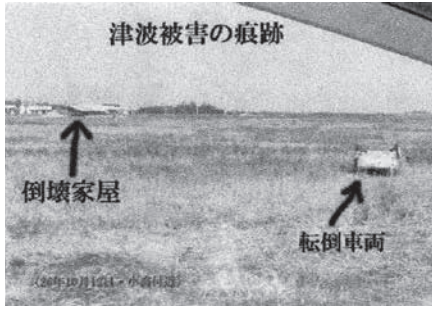


慰霊祭



区の由緒ある伊勢大御神大神宮の森彦宮司により神事が斎行された。黙祷・修祓・降神・斎主一拝・献饌・祝詞奏上と整齊肅々と執り行われたが、斎主の流れるような所作は心地良くさえ感じられた。ここで高橋事務局長から挨拶があり、来賓の追悼の言葉が述べられた。桜井南相馬市長、平田南相馬市議会議長、県議会議員、南相馬市遺族会会長等の方々が、この厳しい現実の中で慰霊祭を執行することの意義・決意・御礼等が異口同音に述べられた。私にも慰霊の言葉を要望されたので、以下のような趣旨のことを述べさせて頂いた。「原町飛行場の5年間は、陸軍航空部隊・航空兵の育成に大きな役割を果たした。現在、全国の各種慰霊祭は、その規模を縮小している。しかし、早くから将来のための対策を講じている団体は順調な活動を行っているが、そうでないところは、草むす慰霊碑のみが残されているという悲しい状況になりつつある。しかし、ここ原町では、原発事故による放射能汚染という未だかつてない甚大な被害を被り、未だに帰宅もできないという困難な生活を強いられる厳しい状況の中で、さえ、多くの方が慰霊祭に参列され、また、このために献身的に支援をされる原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会の





強力な組織等があることから、必ずや将来に亘って慰霊・顕彰活動が継続されるものと確信します。(式後、森宮司様から、今後、二世会を立ち上げて後継者を養成するというお話を伺った。)

祭電が披露された後、南相馬市の男性合唱団「原町メンネルコール」による鎮魂歌が献唱された。全て軍歌で、「原町特攻隊の歌」「戦友別盃の歌」「君らここに甦れ」等6曲が合唱された。初めて聞く歌もあったが、洗練された歌い振りで経験の豊富さを思わせた。

次いで、参列者全員による玉串奉奠、斎主による撒饌・昇神・斎主一拝で神事は終了し、閉式の言葉で慰霊祭は全て終了した。最後は、参列者全員で集合写真を撮り解散となった。

二 所見

○最悪状況での慰霊祭執行の気概に感 激

筆者は、前山本会長が兄上の慰霊祭に毎年参列しておられると聞き、一度は参列したいと思っていた。3年前には機会があったが、東日本大震災の直接被害により、また、昨年は放射能の被害により断念した経緯があった。

今年も、昨年同様、小規模な慰霊祭を執行することであり、また、ごく最近、常磐道が6号線と連絡したとの情報を得て、車で参上することにした。そのため、被害の大きさ・悲惨さを目の当たりにすることになった。富岡1Cから6号線途中までの大熊町・双葉町・浪江町は、放射能汚染のため、主要道路を除き帰還困難区域となっており、部外者は勿論、居住者も立入禁

止となっている。6号線から見る町並みは整然としているが、人影は警備員のみで、他には見当たらず、幹線道から入る側道や家の前には全て遮蔽物が設置されており、到る所草が生い茂り正にゴーストタウンそのものであった。手入れされない家々は傷みが酷く、田畑は雑草が生い茂り、目に見えない放射能汚染をもたらした原発事故の恐ろしさを直接感じた。

高橋事務局長は挨拶の中で「…南相馬市の巨大津波による死者数は1094名、被害家屋は6000棟、農地を合わせた被害は甚大で、震災から3年半を経過したが、復旧・復興の兆しはない。これは原発事故による放射能被曝の懸念が原因である。地震・津波・地盤沈下・風評被害等、四重、

五重の苦しみに耐えながら避難所や仮設住宅での不自由な生活を続けています。今年も交通網の遮断、宿泊施設の不足、放射能被曝の懸念等から、ごく小規模の地元有志による慰霊祭を執行することにしました」と述べられた

が、実際に現地に行ってみると、放射能汚染以外に、津波による被害の痕跡も諸所に見られ、不通となっている常磐線も開通の見込みなく、草に覆われていた。こういう状態が3年6ヵ月続いていること自体許せないし、また、

地元の人達は本当に我慢強いと感じたが、通常であれば誰でも「こんな状況で何で慰霊祭なのか」と思うに違いない。最悪の状況下でも慰霊祭だけは執行するという熱意には本当に頭が下がる思いである。私が現場の生の雰囲気を感じなければ、それ程の感激は味わえなかったと思う。また、慰霊祭を続行しようとする高橋事務局長以下の顕彰会の皆様には、この居たたまれない状況から抜け出すため、同じような苦しみを経験された御英霊から力を頂こうとし、また、御英霊もそれに応える何らかのお力を授けて下さるのではないかと思いつつ帰路について

○慰霊祭の継続と会勢の充実について  
御英霊の心を後世に伝えるため、慰霊祭の継続の必要性は言うまでもない

が、将来の慰霊祭を誰が、どのように支え、実行していくのかについては、早い時期から検討し、対策を講じなければならぬ。本来ならば、国が然るべき機関に命じて継続的に実施・支援させるのが有るべき姿と思うが、現在の大東亜戦争戦没者の慰霊祭は、多くが戦友や旧軍関係者及び遺族が中心となって支え、実施してきた。最近特に高齢化により、その活動が限界に近くなった。戦友の方々は自分達が生きていく限り、戦死された英霊の慰霊に尽くすと言われている。大変有り難いことであるが、では関係者全員が不在となったら慰霊祭は無くなるのか、そんなことはなく、英霊の慰霊・顕彰活動は若い人達に必ず引き継がれて行くと思う。何故なら日本人は、単一民族として過去から連綿と引き継がれてきた精神継承の遺伝子を等しく有しているからである。

問題は、ではどういう人達にお願いするのかということになると、簡単にはいかない。若い年代層は、戦友達ほどの教育・経験を積んではない。戦後の自虐思想と偏向教育は、慰霊・顕彰を簡単には受け入れられない地盤を形作ってしまった。彼等の多くは言うであらう。「慰霊・顕彰って何？何故必要なの？それは戦争賛美では？そんなことより楽しい、やりたいことが沢山ある」と。若い人達の中には、心から慰霊・顕彰活動をしている人達がいるのも事実だが、多くは無関心か反対派であらう。

翻って我が特攻顕彰会を見てみれば、会員数は確実に減少し、入会数は年間50〜60名程度であり、このままではジリ貧である。今までは、旧軍関係者にお願ひすれば説明しなくても入会してくれた。しかし、若い人達にはきちんと説明し、理解させ、同意させなければ入会してはもらえない。家族、親族、友人等義理で入会させても長続きはしない。そこで、今年度は会員募集のため、顕彰会の中核会員が先ず自ら特攻隊についての知識を深め、識能の落差をもって彼等の心に入り込み、説得できるよう、あらゆる機会を活用して自学研鑽する「会員の資質向上施策」を事業として実施している。来年からは、彼等自らが若い人達に慰霊・顕彰について説明し、慰霊祭への参加、顕彰会への入会等の成果を収め、慰霊祭の参列者の若返りに寄与するであろうことを期待している。

これらの趣旨にご賛同頂き、慰霊祭に参列される皆様には、是非若い人達を後輩として同行参拝させて戴きたく宜しくお願い申し上げる次第です。

## 平成26年度明野忠魂塔合祀慰霊祭に参列して

専務理事 衣笠 陽雄

平成26年10月18日(土)、陸上自衛隊明野駐屯地内忠魂塔前において、明野忠魂塔顕彰会(会長鳥崎瑞氏)主催により執り行われた「平成26年度明野忠魂塔合祀慰霊祭」に、当顕彰会代表として参列したので、以下のとおり報告します。

### 一 慰霊祭の概要

明野駐屯地は、大正9年陸軍航空学校射撃班として発足、以来陸軍航空学校明野分校、明野陸軍飛行学校、明野教導飛行師団、第一教導飛行隊等組織の変遷を経て陸軍航空の飛行兵養成を担ってきた陸軍航空の聖地である。

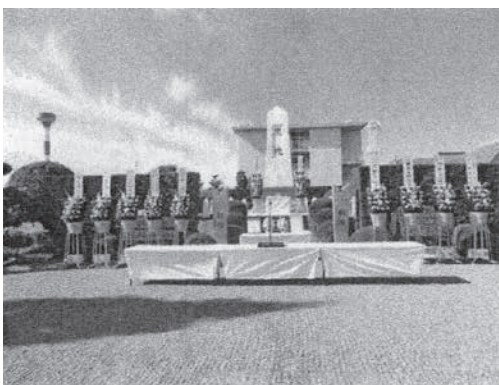
当地から八紘隊、振武隊等の特攻部隊がレイテ、沖繩に出撃し、一九四柱が散華しておられる。また、加藤隼戦闘隊等の飛行部隊を輩出したことでも知られている。

この地に昭和30年陸上自衛隊航空学校が浜松から移駐し、陸軍の伝統を引き継いで陸上自衛隊航空部隊の中核となっている。

慰霊祭の執り行われた忠魂塔は、昭

和17年に建立されたが、改築・移設等が行われ、現在は滑走路横に設置されており、学校の敷地中心部の一等地にあって、伝統継承の要として存在しているようである。忠魂塔には、旧明野陸軍飛行学校関係戦歿者一五〇〇余柱と陸上自衛隊航空学校関係殉職者一七柱が祀られており、航空精神が戦前か戦後へ連綿と継承されている、理想的な慰霊碑であり、慰霊祭である。

式は、半旗に掲げられた国旗の下、開式の辞から開始された。国歌斉唱、拝礼、儀仗と、整斉と進み、明野航空学校長兼明野駐屯地司令大西裕文陸将補が旧軍及び自衛隊の合同慰霊祭と伝統の継承についての決意を、また、明



忠魂塔前慰霊祭会場



野忠魂塔顕彰会会長の鳥崎瑞氏が追悼の辞を述べられた。

次いで参列者全員による献花、慰霊電報披露、中部方面音楽隊による「加藤隼戦闘隊」「抜刀隊」等の追悼演奏、並びに追悼飛行が行われた。追悼飛行は、5機編隊で行うところ、2番機を欠いた4機編隊での飛行が実施された。引き続き儀仗、弔銃、拝礼が行われて、式は滞りなく終了した。

## 二 所見

ここでも、慰霊祭の今後についての問題点が浮き彫りにされている。式後の懇親会で、鳥崎会長は、忠魂塔顕彰会の会勢の推移について、全盛期には500名もの会員が参列したが、現在では80名にまで減ってしまった、と嘆いておられた。慰霊祭は、明野忠魂塔

顕彰会が主催して明野陸軍飛行学校関係の戦歿者を祀ってきたが、昭和46年以降は、陸上自衛隊航空学校関係の殉職者をも合祀して行われるようになった。自衛官殉職者を合祀することにより、神式から無宗教方式となり、旧軍関係者にはわだかまりもあつたようであるが、慰霊祭の準備・実施は、航空学校が全面的に支援しており、将来のことを考えても、自衛隊殉職者との合祀は、適切な判断であつたと思われる。

丁度前日に訪問した隣地の海軍三重空資料館・碑(後述)の管理をしていた若桜会が高齢化により解散し、後の管理を地元の隊友会等に急遽お願をしている状況を知り、明野の慰霊祭は理想

的な新旧交替であると感じた。

## ○津市香良洲歴史資料館の紹介

今回の慰霊祭参列を機に、以前から注目していた津市香良洲町にある「津市香良洲歴史資料館(若桜会館)」を前日に訪問したので紹介する。

当資料館は、若桜会が建立した立派な3階建ての建物で、雲出川河口デルタ地域に予科練教育を専門に行つた三重海軍航空隊関係及び戦時下の市民の生活関連資料を展示し、また、庭園には三重空で教育を受けた予科練各期の碑(銘盤)が建てられている。三重空関連では、大西瀧治郎海軍中将の遺書を始め特攻隊等で戦歿された多くの隊員の遺書その他の関連資料が展示され

ている。館員の説明によると、ここは、航空機の基本的事項の教育が実施された所で、戦闘部隊ではないが、予科練の殆どの隊員が一時過ごした所で、隊員の共通の思い出の場所となつていくとのことであつた。資料については、常時展示は三分の一程度であり、まだ多くの資料があるとのことである。全体から見ると、三重空関連資料が少ないと感じたが、戦時中の市民生活や空襲などの資料を併せ展示して戦争全般を知らしめるという市の方針だからだそうである。また、館の庭園には、予科練各期毎の立派な碑があり、ここで教育を受けた隊員の名が刻まれていたが、変わつているのは、生存者の名前も刻まれていく碑があり、黒字は戦歿者、赤字は碑建立当時の生存者とのことであつたが、現在では赤字の方々も殆ど物故されたとのことである。

確認した銘盤は以下のとおりである。第19期・第23期海軍乙種飛行予科練習生、第11期・第15期海軍甲種飛行予科練習生、第3期・第5期海軍特乙種飛行予科練習生、海軍丙種飛行予科練習生。

庭園は綺麗に清掃され、慰霊祭も執り行われているようであるが、前述のとおり、実質的管理は、自衛隊OB組織に委ねられている。



八紘隊関係資料



津市香良洲歴史資料館(若桜会館)



三重空・予科練各期の碑



平成26年度  
回天烈士並びに回天搭載戦没  
潜水艦乗員追悼式に参列して①

事務局員 金子 敬志

追悼式の概要

回天の第一陣「菊水隊」が大津島から出撃したのは、昭和19年11月8日であった。近年の追悼式は、この日に因んでか、8日に近い11月の第2日曜日に執り行われており、今年は11月9日(日)に執行された。

本慰霊祭は、昭和30年11月8日に第

1回「回天戦死者慰霊祭」として、神式で斎行されたが、平成に入ってから、無宗教の追悼式として執り行われている。

式当日の朝は、夜来の雨が残っていたが、9時半徳山港発のフェリーで大津島に渡る頃は小雨となり、慰霊祭の開始時刻には殆ど止み、時々小雨が降ることはあったが、慰霊飛行が中止されたほかは予定どおり執り行われた。

当日の参列者は、来賓・遺族・招待者が約100名、一般参加者が約150名、計約250名で、例年並みのことであった。

式典は、国歌斉唱、黙禱に続き、回天顕彰会会長原田茂氏が式辞を述べられたが、その中で、「錦秋の良き日に当たり、全国各地より、かくも大勢の皆様方をここ大津島にお迎えして、回天出撃70周年に当たる本年、厳粛盛大に追悼式が執り行われることに、心から感謝申し上げます。本日は、70年前

の御英霊の御決意を慮り、御遺徳を偲びつつ、年に一度のこの日を、御英霊の御決意に恥じることのないよう、平和で誇りある祖国づくりを目指し、反省すべき点は率直に反省し、改めるべき点は速やかに改める決意をする日と

したい。小川宣元回天記念館館長が提案された「周南地域を平和の文化発信地へ」という理念を引き継ぎ、そのスタートとして本年は「周南ピースカップ回天メモリアルヨットレース」を9月14日に開催し、その目的を果たすことができた・・・と述べられた。

続いて、安倍晋三総理大臣(代読)の追悼の言葉を始め、木村健一郎周南市長、海上自衛隊呉地方総監伊藤俊幸海将、村岡嗣政山口県知事代理からそれぞれ追悼の言葉が捧げられた後、奉納居合い、献吟が行われた。

次いで、メルソソレイネ合唱団による「回天追悼の歌」が奉唱される中、参列者全員による献花が行われた。本来なら、献花の間に追悼飛行が実施される予定であったが、天候不良により中止された。

献花終了後、俳句「回天」の朗読、地元有志のバンド「T.S HEART」による演奏、大徳山太鼓「回天」の力強い奉納演奏が行われた。

終わって、原田回天顕彰会会長の挨拶、続いて遺族代表として、関豊興少尉(注)の御遺族からの挨拶があり、追悼式は滞りなく終了した。

(注) 関 豊興少尉

兵科1期予備生徒、秋田県出身

「回天特別攻撃隊・多聞隊」の先



「回天碑」(題字は黒木博司大尉の自筆)



追悼式会場



追悼の言葉・海上自衛隊呉地方総監伊藤俊幸海将

頭を切って「伊号第五十三潜水艦」に搭載、昭和20年7月14日大津島を襲撃、沖繩方面で作戦中、母艦が敵艦5隻に包囲され撃沈されそうになった時、艦長に志願して荒川正弘1飛曹(甲飛13期予科練土浦空、山形県出身)と共に発進し、その献身的な突撃により敵の攻撃を阻止し、母艦を救った。

## 平成26年度

### 回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参列して②

会員 東 裕一

小雨に煙る徳山港の棧橋で、連絡船の改札が始まる。乗客は多い。客室に空席はあったが、迷わず上甲板の吹き曝しの席に向かう。海を戦場とした者のDNAである。船が棧橋を離れる。ふと70年前に大津島から出撃した回天の搭乗員もこの景色を見たのだろうか。・が、いや、秘密兵器である回天の搭乗員が人目の多い徳山から大津島に入ることではなく、恐らく呉と大津島の間に海上定期便があったのだらうと思ひ直す。私は海上自衛官としての現役当時から興味があったので、大津島の事も回

天の事も文字では理解している。しかし、自分の目で現地を見るのは初めてである。

雨脚の速くなった徳山湾を10分も走ると、右側に大津島が見えてきた。頭の中で想像していたイメージとは違って、結構高い。所々に花崗岩の岩肌が見える。海から見ると平地が少ない島だ。馬島港に近付くと、山の中腹に、旗竿に掲げられている大きな旭日旗が見え、そこが慰霊祭の場所であることを知る。200トンほどの連絡船は、慰霊祭に参加する満席の参列者を乗せて馬島港に着いた。すぐ後から臨時便も追いかけてくる。

幸い雨雲が通過して僅かに残った霧雨を折り畳み傘で凌ぎながら、まず発射場跡に向かう。上陸した馬島港からも、写真で見慣れた発射場の建物が見える。ただ、古い写真に写っている回天を海面に降ろすための大きなクレーンは既に見えなかった。恐らく腐食が進んだため撤去されたのであろう。上陸して数分で到着するトンネルの入口を入ると、暫くは直線のレール跡が続く。この試験場で性能が確認され改良が図られた、九三式魚雷や回天を運んだレールは既に撤去されているが、トンネルの中央部にはレール跡が複雑線となった離合場所もあり、合理的

な設計が伺える。長さ300mほどのトンネルは試験場の東海岸と西海岸を結ぶ通路の役割だけではなく、空襲から秘密兵器を守り、航空偵察の効果を減じたものであろう。

西海岸に出ると、海が大きく開け、長射程魚雷の試験に耐えるだけの広さがある。そのまま発射場に向かう。何か遺構のコンクリートが大変新しく見える。建物に入ると、床の真下が海になっただけで、2条の溝があり、波打つ海水の中に小魚が泳いでいる。酸素魚雷は、ここからは静止状態から発射されたものであろう。

古い写真に見られるクレーンは、台座だけが残っていた。再び降り出した雨に追われてトンネルに戻る。トンネルの東端から回天資料館までは緩やかな坂を折り返しながら上る。

高低差40m程の坂を上り切った所が資料館への道路で、石畳の両側の芝生に、回天で亡くなった烈士104柱の石碑が並び、御名前と出身県が刻まれている。追悼式に参列の御遺族が自分にゆかりの石碑にそれぞれ花を手向けている。

慰霊祭の開始までにまだ時間があるので、資料館を見学する。多くのパネルが展示された一角に回天の実物大のカットモデルが置かれている。

内部は本当に狭い。この展示室でこもる照明に照らされているが、内部に乗り込んで天蓋を閉めれば真っ暗である。操縦席は旅館の座椅子の如く座面が低く、座り心地は悪そうだ。天井は僅かに高くなっており、正面に上部構造物から1m程突き出した特眼鏡の接眼部があるが、座席が固定されているので潜望鏡のようにグルリと回転させて後方まで見ることはできない。体を振りながら左右60度ぐらいが最大の視野となる。それよりも露頂状態でも海面から1m程度にしか伸びないレンズ位置では波を被って外が見えないのではあるまいか。内海の平水では速度を落とせば島や岬の方位を測定できたというが、外洋では目標の実像を確認するのさえ困難であろう。

この回天の後部三分の一は、水上艦艇用に開発された九三式三型酸素魚雷そのものであり、単体では52ノットの速度で22kmを航走する優れた性能を持っている。この酸素魚雷で、回天として開発された中央部の操縦席と最前部の炸薬室を押し30ノットで突進し、敵艦に体当たりするのがこの回天である。

魚雷の機関は、霧状にした灯油を圧縮空気で燃焼させて起動し、安定すると徐々に空気を酸素に替えて最後は純





奉納太鼓「回天」・大徳山太鼓「回天」保存会



回天烈士の石碑



トンネル



魚雷発射施設



回天訓練基地

酸素で激しく燃焼させて高温・高圧のガスを作り、2気筒のピストンエンジンを駆動する構造である。このため操縦員が回転数を制御できる幅が狭く、出力を下げ過ぎると燃焼が止まり、再起動はできない。魚雷であるから船舶のような後進の機構は付いていない。海軍では、機関の運転に圧縮酸素を使っていることは、最高の機密とされておられ、酸素のことを「第二空気」と呼んでいた。資料館のカットモデルでも酸素タンクは今でも「第二空気室」と書かれている。

この回天を自在に操縦して敵艦に体当たりするのは、至難の技だというのが、これを見た印象である。

11時30分から追悼式が始まった。主催者側は雨天を予想して会場の前半分にはテントを設置していたが、参列者は250名分程用意された折り畳み椅子席にぎっしり、幸いなことに雨は止み、後ろ半分も濡れずに済んだ。開式の言葉に続いて、全員で国歌斉唱、戦没者に対し1分間の黙祷を捧げた。原田茂回天顕彰会会長の式辞があり、追悼の言葉は、安倍晋三総理(代理秘書)、地元周南市長、伊藤俊幸呉地方総監、山口県知事(代理)がそれぞれ述べられた。

次に、居合いと詩吟が奉納され、鐘楼の鐘を合図に地元の合唱団による「回天追悼の歌」の合唱が流れる中、参列者全員による献花が始まった。US-2、防府北基地のT-7編隊、小月基地のT-5編隊が追悼飛行を行う予定であったが、雨は上がったものの、雲が低く、残念ながら中止となった。今回、呉地方総監を始め、地元山口県下の陸海空自衛隊基地から、指揮官(代理を含む)の参列があったことは、OBとしても喜ばしいことであった。世は移ろい、最近の若者は大東亜戦争のあったことすら知らない人も多いと聞くが、このような行事を通じて、若い世代に我が国の正しい歴史を伝えていくことが、英霊の御霊に感謝する一番の近道ではないだろうか。各地で行われている戦没者の慰霊祭を観光資源にしているとかの批判も耳にするが、先の戦争で亡くなった英霊に対し、私たちは、皆様のことを決して忘れてはいません、という意思表示ができれば一番の供養になるのではないかと思います。

### 海軍築城基地・神風特別攻撃隊 菊水部隊銀河隊出撃の地を訪ねて

理事 水町 博勝



「神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊出撃之地」碑

築城基地は、福岡県の東部、北九州市の南、大分県との県境近くにあり、昭和15年、呉海軍航空隊の基地として建設を始め、昭和18年から終戦まで、築城海軍航空隊が所在した。なお、世田谷山観音寺の月例参拝の折、会員で第16期乙種飛行予科練習生出身の零戦パイロットであった野口剛氏から、築城基地で終戦を迎えたというお話を伺ったこともある。

今年、終戦から70年の節目の年である。築城基地は、終戦後米軍が接収し、朝鮮戦争当時は、米軍の後方基地となり、その後航空自衛隊の発足により、同基地を引き継いだ。昨年、自衛隊は創立60周年を迎えたが、戦闘航空団が整備され、同基地の第8航空団が設立されてから50周年の節目の年を迎えた。小生は、22年前、同基地に2年間勤務したことがあり、昨平成26年11月30日、同基地で催された築城基地航空祭に参加のため、同基地を訪れた。

空港の玄関口、ベースオペレーションから滑走路を見渡すと、その一角に「神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊出撃之地」碑が建っている。この碑は、終戦から34年経った昭和54年に建立されたもので、特攻隊出撃地の碑としては、大分遅れて建立されたが、その経緯は、



除幕式当時

「昭和五十三年九月五日一通の手紙が御遺族からの手紙により、同基地から特攻機が出撃した事実を知らされ、当時の関係者の驚きと共に英霊への尊厳を欠いていたとの思いから早速建立されたということ、その思いが伝わってくる碑でもある。」

当時の基地新聞には、次のような記事が掲載されている。「昭和五十三年九月五日一通の手紙が基地司令(当時は久松将補)の手元に届いた。差出人は山口県防府市の松永道子という特攻隊のご遺族であった。その内容は『本年三月鹿屋市主催の特攻隊慰霊祭に参列したところ、弟は築城から出撃したことが分かった。出来れば彼の出撃の地に立ち、当時の資料があれば見せて頂き霊を慰めたい。』というものであった。」



築城基地には当時の資料は何一つ残っていないが、調査の結果『神風特攻隊菊水部隊銀河隊』は太平洋戦争も末期に近づいた昭和二十年三月

十八日大分から一機、鹿屋から九機の爆撃隊、築城基地からは六機が午前六時三十分離陸、宇野篤海軍大尉指揮のもと、九州方面の米機動部隊に対し黎明特攻(爆撃)を実施、米空母群に多大の損害を与えたが、未帰還八機を出した。松永道子さんの弟松永輝郎海軍大尉は築城を前進した六機の指揮官であったが五機が未帰還となり、松永大尉以下十五名が南方洋上に散華した、ということが判明した。そして、御遺族を始めとして基地隊員の協力を得て十五勇士を顕彰して『神風特攻隊銀河隊出撃之地』碑が昭和五十四年三月十七日ベースオペレーションの脇に建立され、厳粛にしかも盛大に除幕式が挙行された。」と書かれている。

海軍時代、米軍時代、そして自衛隊と、当基地に勤務した人はいたはずで、事実を語り継がれなかったことは、語ろうとしなかったか、又は語る機会が無かったものと思えた。

小生が築城基地に勤務している間に、同基地に海軍航空隊が開設されて以来50周年を迎えるということで、語り継がなければならない戦中、戦後の体験者の貴重な記録、特に記録の無い海軍時代を探し出し、記念史誌の一部として永遠に書き残すこととなった。そして、調べることによって戦時下を



体験していない若い世代の自衛官にとっても何か教訓を得るものがあると思いの思いもあつた。部署の全員がその思いで資料を集めた結果、海軍航空隊の基地建設の思い出、飛行隊長の回想、訓練に励んだパイロットや特攻隊員の記録、整備員等の思い出、空襲を受けた基地周辺の町の方の思い出等々を取

録し、小生が転動した翌年『築城基地開設五十年史』は完成した。改めて読み直し、その中から特攻に係る一つを紹介したい。なお、掲載に当たり、記念誌発行人である当時の基地司令（大串空将補）の了承を得た。その記事は、語る機会の無かつた方で、基地勤務OBの方の記憶によるものである。

◇

### ○「菊水隊銀河隊」を見送った整備員の回顧

元整備員・元防衛庁技官

秋吉久米雄氏

祖国日本の勝利をひたすら念じながら、命がけて戦った当時の模様について、出撃準備と松永大尉以下十五勇士を見送った一人として、この一文を捧げ御冥福を心からお祈りしたい。

本年は松永輝郎大尉殿の五十回忌に当たるといふことは、十五柱の英霊がその真実を伝えることを小生に求められたことと思ひ、走馬灯のように過ぎ

去つた五十年前の一日の出来事を断片的に整理してみた。

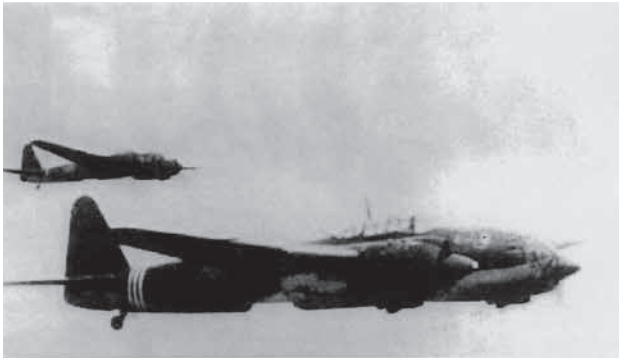
戦局は我に厳しく、本土決戦を呈するようになった昭和十九年末頃から、神風特別攻撃隊菊水部隊の航空機の尾翼に「二六二」の文字が見られた。これが特攻機・銀河隊である（当時、この銀河双発機は、中距離爆撃機として世界最優秀機と言われていた。）昭和十九年二月四日、第一機動艦隊は戦艦大和、武蔵に守られた空母九隻、艦艇五十隻が呉軍港を出港、南方に転戦したが、サイパン戦などにおいては我に利あらず、内地に帰還した。その中の第一航空隊、三番艦、瑞鶴に

乗り組む艦上攻撃機天山二十四機を指揮する小野少佐の一隊は、夜間でも空母に発着艦できる当時としては優秀なパイロット達であつた。その後天山隊は地上勤務となり、六〇一空勲隊の中の二〇二隊として、天山二十四機を保有し、宮崎県赤江基地に温存されたが、台湾沖海戦で隊長機以下十八機が未帰還となり、照明隊六機のみが帰還した。その六機を基幹として銀河攻撃隊を命ぜられて厚木基地で部隊の編成を完了。続いて豊橋基地で猛特訓を重ね、急降下の出来る部隊となつた。二十機は赤江基地に帰つた。全盛期には四十

機を擁した時期もあつた。そして先人の偉業を偲ぶかのように以降、銀河機の尾翼に二六二の文字が大書されるようになったのである。これが銀河攻撃隊の始まりで、昭和二十年の初め頃からは特攻部隊に改編されていた。そして彼等の死闘は日夜激しく繰り返された。緊迫の度はいよいよ激しく、戦局が日一日と我が方に不利となる中で、敵空母は本土にしばしば接近、艦載機の来襲が幾度かあつた。二十年三月の中頃だつたと記憶する。鹿屋の司令部から二六二隊の半数は築城に避難せよとの命令を受け、松永大尉を長とする一隊（多分十五機だつたと思う）が、築城基地にお世話になつた。航空機は松原地区の掩体壕に入れて整備作業に専念した。松原地区も今より広く、松の木も大きく茂っており、松の木を切つては誘導路等のカモフラージュをしたものである。

機を擁した時期もあつた。そして先人の偉業を偲ぶかのように以降、銀河機の尾翼に二六二の文字が大書されるようになったのである。これが銀河攻撃隊の始まりで、昭和二十年の初め頃からは特攻部隊に改編されていた。そして彼等の死闘は日夜激しく繰り返された。緊迫の度はいよいよ激しく、戦局が日一日と我が方に不利となる中で、敵空母は本土にしばしば接近、艦載機の来襲が幾度かあつた。二十年三月の中頃だつたと記憶する。鹿屋の司令部から二六二隊の半数は築城に避難せよとの命令を受け、松永大尉を長とする一隊（多分十五機だつたと思う）が、築城基地にお世話になつた。航空機は松原地区の掩体壕に入れて整備作業に専念した。松原地区も今より広く、松の木も大きく茂っており、松の木を切つては誘導路等のカモフラージュをしたものである。

『特攻出撃』それは三月十七日の夕刻であつた。突然整備分隊長真田大尉を通じて分遣隊長・松永隊長から「明朝、特攻六機を準備してくれ、爆装二五〇キログラム二個・出撃時刻〇五三〇」との命令を受けた。出撃に万全を期するため、我々整備員は午前三時起床、特攻機の前に整列、直ちに作業開始、午前五時予備機と共に七機を滑走路横に待機させ、出撃準備を完了した。出撃命令が来たのは、それから大分時間が経つてからであつた。辺りは段々明るくなり、我々は気を揉んだ。多分、敵空母の所在確認に手間取つたためであろう。我々は六機の出撃を整列して見送つた。松永大尉は、搭乗する直前に、私たちの手を一人一人握つて、「大変世話になつた！後を頼む、行つて来ます。」という言葉を残して発進した。これが松永大尉との永久の別れとなつた。我々は急いで予備機を掩体壕に入れ成果を待つた。十日おきぐらいに特攻機を送り出す我々にも、何故かこの日の出撃は深く印象に残つた。戦況は手に取る如く分かるのである。「突入姿勢に入る」と、通信員が長一声を連送する。その日敵艦隊に与えた戦果は甚大であつた。折しも一機の銀河機が着陸姿勢に入り緊急着陸した。被弾のため滑走路の草むらに車輪をめり込ませ左に大きく傾いて止まつた。ホツとした。爆装員が爆弾を外すまで我々は遠くで見守っていた。それで我々の損害は五機であつた。私は特攻機整備員として終戦まで約二百機に近い銀河機を見送つたが、このひとつこまがまざまざと記憶に残っているといふことは松永大尉が派遣隊長として、我々整備員との連絡を絶えず密にした



### 海軍陸上爆撃機「銀河」11型

全長×全幅：15×20m  
 自重：7,265kg  
 乗員：3名（操縦・偵察・電信各1名）  
 発動機：中島「蒼」12型空冷1,825馬力  
 最高速度：時速548km  
 航続距離：最大5,370km



「銀河」の機首：電探（レーダー）用の八木アンテナ装備



事と、裕永大尉の日ごろの人格の然らしめた所以であると思う。当日の午前九時頃、グラマン十七機の来襲を受けて、第四格納庫前の練習機、九六式陸攻などはことごとく炎上したが、大きく傾いた銀河機は激しい機銃掃射でもとうとう炎上しなかった。午前十時頃宮崎より隊長黒丸大尉が心配して単機で激励に来てくれたが、裕永大尉以下十五名の戦死を報告した当時に思い出され感無量である。この出撃が、築城からの特攻としては最初であり、最後であった。

私も老境に入り、仏に手を合わせお寺にお参りする様になったが、あの裕永大尉が出撃の際の「行って来ます」の言葉の意味がようやく分かり始めたような気がする。魂魄は故郷に帰り、永遠に祖国を守り、我が民族の発展を乞い願うとの意味であつたらうと思う。以上が掲載文である。築城基地勤務の先輩の回顧から、「神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊出撃之地」碑を訪ね、十五名の特攻勇士の名が刻まれた碑の前で、エプロンから滑走路・周防灘を望み、平和で忘れかけてきた往時を偲ぶ訪問であつた。次号以降に、特攻機が出撃し、敵機の急襲を受ける緊迫した中での当時のパイロットの訓練等、戦後生まれの者が体験し得ない有事下の様子を記念史誌の中からお伝えしたいと思う。

## 第1空挺団研修に参加して

会員 原 知崇

会員の資質向上施策の一環として、平成26年10月7日、第一空挺団研修が実施されました。晴天にも恵まれ、参加者は13名でした。

第1空挺団とはご存じのとおり、パレンバン空挺作戦や義烈空挺隊で知られる帝国陸軍から引き継がれた、挺身赴難の伝統を習志野に受け継ぐ、日本唯一の落下傘部隊です。

陸上自衛隊習志野駐屯地の當門を潜ると、部隊隊舎までの間に、まず目に入るのが、空挺殉難者慰霊碑でした。

殉職された隊員のお名前と、それぞれの殉職の状況が彫られた石碑があり、それぞれの中隊の方々が今も参拝されているとのこと、降下中の殉職というのはそう多くないとの説明を受けましたが、一人ひとりの状況を拝読していくと、演習中に予備傘開かないまま着地し殉職された若い隊員もあり、事故が少ないというのは、練度の賜物なのであり、落下傘にその身を預け、高空から飛び出すということは、平時にあつても死と隣り合わせの訓練に、その危険を熟知しつつ、恐怖心を押し殺し、粛々と演習に臨まれている隊員の



皆さんの緊張感をまず研修の最初に思い知らされた感じがしました。

慰霊碑に隣接して建つ「空の神兵像・礎の碑」を拝観しました。「空の神兵」とは、帝国陸海軍と自衛隊の空挺部隊に対する尊称として知られています。が、その像は、元々は昭和17年の大東亜戦争美術展において、朝日新聞社賞を受賞した「天降る像」を銅像化したものだそう、一式傘を装着した帝国陸軍空挺隊員の姿を永久に伝えていきます。

その後、衣笠専務理事以下4名で副団長山口耕司1等陸佐を表敬訪問しましたが、空挺団の今昔、陸軍と自衛隊、更には信号ラッパの今昔等について、短い時間でしたが、話に花が咲きました。応接室の壁面には、パレンバン空挺作戦を描いた大きな絵が掛けられ、

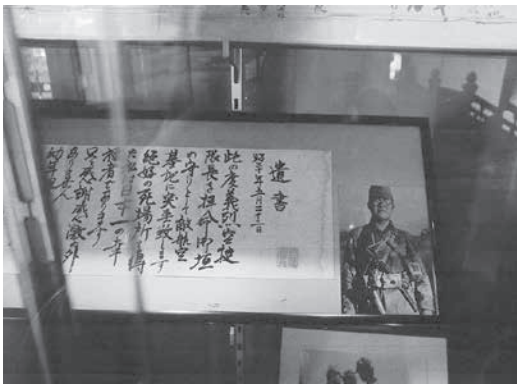


空の神兵像

第1空挺団と陸軍落下傘部隊との強い精神的絆を垣間見ることができました。

続いて、駐屯地講堂において、広報班による駐屯地及び空挺団の概要について説明を受けましたが、映像による分かりやすいレクチャーで、戦前の騎兵学校及び栄えある騎兵聯隊時代から現在の精鋭無比の第1空挺団に至るまでの概況と、陸上自衛隊における落下傘部隊の目的、装備、演習の種類、降下のイメージ等を掴むことができました。

次いで、空挺館に場所を移して研修が続けられました。空挺館は、かつての御馬見所を目黒の騎兵実施学校から移設したもので、明治天皇や皇族方が馬術や騎兵の教練、演習を御覧になら



義烈空挺隊奥山隊長の遺書

れた所とされる瀟洒な造りの洋館ですが、ここが帝国陸軍の騎兵、空挺、そして陸上自衛隊の空挺に関する資料館となっています。大東亜戦争におけるパレンバン空挺作戦、レイテ空挺作戦

の説明を受ける中で、空挺部隊の実施する作戦遂行の困難さ、また、一兵に至るまで、その困難に怯まず、作戦遂行に邁進しなくてはならない状況を伺い、特攻ではなくとも、特攻に準ずる気持ちで出撃して行ったであろう、陸軍空挺隊勇士の心中を想起しました。

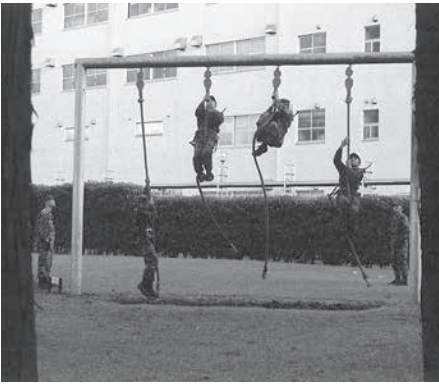
特攻隊である義烈空挺隊についての説明は、恐らく当会の研修ということに特に時間を割いて頂いたものと思いますが、陸軍最後の空挺作戦は、大東亜戦争の最後の激戦地沖繩において、昭和20年5月24日深夜に実施されましたが、最早それは、蒼空に白い傘を咲かせる神兵の姿ではなく、隊長以下136名の隊員が敵飛行場に胴体着陸を敢行し、敵の飛行機、司令部、物資等を攻撃するという説明に、改めて息を呑みました。柄に付けられた破甲爆雷の使用方法というような専門的な質問も出ておりましたが、担当された空挺館の隊員は実に熱心に研究されており、淀みない回答に、研修参加者も感心している様子でした。誰もが展示室の中で、真摯に歴史と向き合い、展示

品を目で追う姿が印象的でした。陸軍の落下傘など大変貴重な実物の史料も数多く蒐集されており、御英霊の遺書や遺品をそのまま目にしながらの研修は大変意義のあるものとなりました。

研修は体験的な部分へと進み、落下傘の装着体験、跳出塔体験へと続きます。落下傘と背嚢を装着してもらい、「重い！このまま歩くのも大変！」と、賑やかだった参加者も、昼食後、今度は高さ11mの跳出塔を目の前にすると、やや声を失った様子であった。跳出塔とは降下のために機体から跳び出す動作を訓練するための施設で、高い階段を上った所に輸送機の胴体を模したものが造られており、助教の号令で次々に跳び出すと、縛帯が落下傘の代わりにより、降下を模して飛行機の後方に運ばれて行くように出来ています。一同、迷彩服をお借りして、縛帯と予備傘を装着してもらい、跳出塔へと上る。地上で動作の反復練習もしたし、縛帯がワイヤーにきちんと結着されていることも判っている。信頼するに足る我が日本の陸上自衛官、しかも精鋭無比の空挺団員によって安全も確認してもらっている。全部頭では判っているのだが、しかし、11mというのは、人間の心理的に一番恐怖を感じる高さ



跳出塔



レンジャー訓練の一部

設定してあるのだそうで、そこに立つてみると、体がギクシヤクする。索が切れたら、絡まったら、万が一にも金具に不備があったら、変な落ち方をしてしまったりどうなるのだろう。同時に、ここまで来て自分一人が飛び出せなかつたらどうしよう、次々に飛び出して行く流れを自分が止めてしまったら恥ずかしい、研修参加者と担当の隊員の皆さんの前で、自分の臆病をさらけ出すことになるのか……。短い時間の間に、色々なことを考えてしまいました。ほんの小さな体の不都合も、何だかそれが原因で大きな事故に繋がるような気さえてしまいました。死なないと分かっている練習用の塔から

飛び出すだけで、これだけ怖いのか、では、実際の落下傘降下とは、一体どれだけ怖いものなのか。それが敵陣の真っ只中に斬り込む直前であつたらどうか。その時、自分なら降下口に進めることができるだろうか。想像は様々に膨らみます。先程空挺館で向き合つたはずの史実は何だつたのか。今自分が向き合っているものの千倍も万倍もの苦境を越えて、空挺隊員や特攻隊員は飛び出して行つたのではないのか。しかし、やがて自分の順番が呼ばれ、降下口で姓名申告をし、助教の号令が掛かつた瞬間、眼下の11mというのは何も感じないものになつており、自分でも驚くほど自然に飛び出すことができたのでした。こういうところは、日本人の特性であるのかも知れません。

安全な11mと、決死の出撃は到底比較できるものではありませんが、平素安穏と平和を謳歌して暮らしている私にとつては、決死の出撃をして行つた先人達の万分の一の気持ちであつても、ほんの少し追体験することができたのではないかと思ひました。

跳出塔を後にして、次に向かつたのは、高さ83mの降下塔です。空挺隊員はこの塔の四方に突き出た支柱の先端から落下傘の操作をしつつ降下を実施し、次いで飛行機からの実降下へと進む、言わば最後の模擬降下訓練となる場所です。エレベーターで上部まで上がり、キャットウォークに立つと、習志野が全周一望にできて素晴らしい眺めですが、地上遥かに遠く、こうして地上からの高さが終始気になるのも、空挺団研修ならではと感じました。

その後、一旦駐屯地を出て、習志野演習場を見学の後、空挺レンジャー課程の障害走を見学しましたが、人間としての体力、精神力の限界に挑戦するような、厳しいメニューを実施する中で、助教や先輩から厳しい叱咤が飛び、銃後の一国民として、自衛隊への強い信頼感を得ることができました。

空挺館での本物の史料と向き合つての学習と、跳出塔などで実地の体験、

この二つの経験は大変大きなものでした。学習と連続した体験によって、先人の心のうちを、頭と体、そして心で立体的に感じる事ができたと思ひます。是非、来年度以降も本研修会が開催され、また新たな方が参加されることを期待致しますとともに、任務御多忙中にも拘わらず、私達の研修を支えて下さつた第1空挺団の皆様にお礼を申し上げます。

「英霊を偲ぶ心の旅」に参加して①  
 会員（福岡県） 寺本 優子

昨平成26年10月20日から22日まで、「英霊を偲ぶ心の旅」に参加させていただきました。心に強く残つた今回の3日間の事を少し綴つてみようと思ひますので、会員の皆様にご覧頂ければ幸いです。

1 はじめに

——私と特攻隊との出会い——  
 私の本棚や枕元には、特攻隊関連の本がずらりと並んでいる。「特攻隊の事をもっと詳しく知りたい」と思つて読み続けるうちに、いつの間にかそうなつてしまつていた。もちろん、「日本に特攻隊が存在した」という事を知らないわけではなかつたが、特攻隊が



出撃した歴史的背景や特攻隊員の真実の姿などに関しての知識は全くゼロ。幕末・明治維新の頃の歴史が好きで、それ以降の事は何となく理解している程度である。第二次世界大戦に至っては更によく分からない分野で「難しそう」と敬遠気味の私だった。そんな私が特攻隊を偲ぶ旅に参加したいと思うようにまでなったのは、不思議な偶然としか言いようがない。始まりは1本の動画であった。

一昨年の夏、私はお気に入りのアメリカのドラマがあり、ネットで毎日のように検索してはドラマの動画を楽しんでいた。ある日、カラフルな動画の一覧が並ぶ中の一つだけ黒の画面が入っていた。何気なくクリックして現れたのが「特攻隊の遺書」であった。えーっ特攻隊？戸惑っている私をよそに動画は始まっていった。これが私と特攻隊との出会いだった。忽ちにして私は、ぐいぐいと動画に引き込まれていった。何と清らかな佇いだろう……。純真で真摯な若き特攻隊員達の姿がそこにあった。それまで漠然と抱いていた「特攻隊＝恐ろしい」というイメージとは全く違う、強い衝撃を受けた。動画に流れる遺書を読むうちに、泣けて泣けて涙が止まらなくなっていた。

遺書に込められた愛情、優しさ、勇

気、覚悟、美しい心情と高貴なる精神性が溢れ出ている。「特攻隊とは、こういう人達だったのか、知らなかった。いや、知ろうともしなかった。こんな立派な人達が、こんな美しい精神が、群れをなして日本を守って下さったのか、今まで知らずにいて申し訳なかった。本当に有り難うございました」と、私は一晩中、沢山の特攻隊の動画を見続け、気が付けば、夜は白々と明け初めていた。1ヵ月間、暇を見付けては動画を見続け、お盆の8月15日に、県の護国神社へ初めてお参りさせていた。ちょうど「みたままつり」があった、夕暮れの幻想的な色とりどりの献灯を目にしたのも初めての体験だった。意識も変化し、第二次世界大戦ではなく、「大東亜戦争」と変わった。護国神社に祀られた英霊の方々への感謝の祈りを捧げた。命を懸けて日本を守って下さった英霊に対して尊敬と慰霊顕彰の思いを捧げると共に、英霊が守られたこの国を私も守っていくお手伝いをしようと誓った。

それからというもの、遅れ馳せながら、大東亜戦争や特攻隊に関する本を次々と読み、分からない点は詳しい方にお伺いしながら、ようやく大東亜戦争がどんな意味を持つ戦いだったのかが掴めるようになってきた。

大刀洗や宇佐、知覧など、足を運べる範囲内での特攻隊出撃基地にも出掛けて、慰霊と感謝の祈りを捧げた。しかし、鹿屋、串良、万世などの出撃地となると、個人で訪れるには、それぞれがかなり離れているので、交通手段や日程をどうするかなど思案している最中に、今回のツアーのお知らせが来たので、迷った末に申し込みをさせていただいた。まさかこのツアーが、思いもよらぬ不思議な旅になるなどとは想像もしなかったのだけれど。

## 2 只一筋に征く―新幹線の中で

10月20日、月曜日、出発の日。唯一人福岡から参加となる私は、博多から鹿児島まで新幹線に乗り、その後鹿児島空港でツアーの皆さんと合流する予定だった。新幹線は、やはり、速い！6月に知覧に行った時は高速バスを利用したのだが、朝4時半に家を出て高速バスに乗り10時過ぎに鹿児島に着。それから路線バスに乗り継いで、知覧に到着した時は既に昼過ぎだった。新幹線は、あつという間に私を鹿児島に運んでくれる。遠い遠い場所と思っていた知覧が、ぐっと身近に感じられた。新幹線の中で読んだのは「ユキは十七歳 特攻で死んだ―子犬よさらば、愛しいのち」毛利恒之著。万世も訪問するので、子犬を抱いて愛おし

む5人の特攻隊員で有名な話を、少しでも詳しく知ってから万世に行きたいと思い、用意していたのである。

この中で、ユキこと荒木幸雄伍長が目田原の西往寺で書き残していた言葉が、「只一筋に征く」であった事を知る。一途で純粋な決意が胸を貫く。わずかまだ17歳の少年が、真剣に国を思い、命を懸けて一直線にブレインに突入していったのである。「自分達がこの国を守る！」と思いを定め、真一文字に出撃していった姿が目浮かぶようだ。雨雲が途切れた空には朝の白い太陽の光がうつすらと広がり始めていく。

新幹線は、ちょうど出水の辺りを流れるように走っていた。

## 3 旅の始まり―出会い

いよいよ鹿児島に到着。さくらツアー吉満さんが改札口で待っていて下さった。大変感じの良い温厚な方だった。荷物を運んだ駐車場の所では、今回のツアーのガイド役を務めて下さる新垣さんと合流してご挨拶。新垣さんは10歳の時に特攻隊を知り、以来55年間も特攻隊の研究をなさっていらっしやるという。特攻隊を知ってから僅か1年しか経過していない私にとっては大先輩なのだ。新垣さんには旅行中、特攻隊に関する様々な知識や見識を披露して頂き、勉強になる事ばかりだっ

た。特に新垣さんが語られた「現代にも特攻精神は受け継がれている。特攻隊員の生まれ変わりである若者達も沢山存在する」という、東日本大震災の時の話には、深い感動を覚えた。ツアーに参加できて本当に良かったと思った。程なく車は鹿児島空港に到着し、東京からツアー参加の皆さんをお迎えした。

山口多門中将のご子息、山口宗敏さん、子供達のために神話の紙芝居を作り続けていらっしやるKさん、特攻隊をこよなく敬愛なさっている双子のWさん姉妹。新たにこちらの5人を加え、全部で8人が、今回のツアーのメンバーである。初対面の挨拶を交わした後、いよいよ英霊を偲ぶ心の旅は始まるのだった。

#### 4 青い空に消えた―都城・鹿屋

私たちを乗せたマイクロバスは、一路都城へ。陸上自衛隊の基地の中に残る、旧歩兵第二十三聯隊本部跡都城駐屯地の郷土館を見学した。その後、陸軍墓地、都城疾風特攻振武隊慰霊碑を訪れた。献花後に全員で祈りを捧げる。ここから出撃した隊員の名前が刻まれている。「慰霊碑に刻まれた名前を見るだけでいいから見てやって下さい。彼らの慰霊になりますから」とおっしゃる新垣さんの一言にさえ、特攻隊員への愛情が滲んでいる。

新垣さんの説明の中に聞き覚えのある二人の名前が出てきた。新田祐夫伍長と宇佐美輝夫伍長。神坂次郎の名著『今日われ生きてあり』に紹介された同時出撃する親友二人の若者だ。二人の墓は、新田家により、一基の墓標として二人並んで刻まれていたとあったが、やはりこの慰霊碑にも一番最後の出撃者として名前を連ねていた。宇佐美伍長の遺書は「日本一の御母様、今日トランプ占をしたならば…」という有名なもので、その心根の優しさに私も涙した一人であった。

「何故、この2機だけが7月1日に出撃したんでしょうね…」新垣さんがポツリと呟かれた。そうだ、何故最後にこの2機だけが…。ふと晴れ渡る空を見上げた。7月1日、たった2機で出撃していった彼らは、寂しくもあり、心強くもあつたであろう。私達は、ひっそりと静まっているこの場所を、万感の思いで後にしたのであった。

昼食後訪れた場所は、鹿屋航空基地史料館。近年『永遠の0』の主人公が出撃した場所としても知られている。広々とした自衛隊の基地の一角に、立派な史料館が建っていた。一人一人の遺書や遺影を見て回る。若い。若過ぎる…。人生の春を迎えたばかりの若者達、国家が滅亡する瀬戸際において

命を懸けて戦ってくれた。この尊くも重い事実に対して頭を垂れ、冥福を祈らずにはいられない。涙なくしては読めない彼らの最後の手紙であった。

見学を終えると、外は既に陽が傾こうとしていた。吉満さんのご好意で、鹿屋の慰霊碑、桜花の慰霊碑にもお参りすることができた。真つ青に晴れた空に、この日は飛行機雲が幾筋も幾筋も走り、淡く白い航跡を残して行く。それはまるで翔け昇って消えていった英霊達の魂のように見える。けれど、秋の日のつるべ落としの中で、青く輝いていた空も忽ち光を失い薄暗くなってしまった。

街灯一つ無い一本道をヘッドライトだけを頼りに走り続け、夜の7時過ぎにようやく車は、申良海軍特攻隊戦没者慰霊塔に到着した。私達が「あれも見たい」「ここも行っておきたい」という無茶ぶりの要望をヒソヒソと話していたので、吉満さんが実直にそれに応えて下さった結果、予定が大幅に遅れてしまったのだ。吉満さん有り難うございました。

#### 5 そして全員が見た―申良

申良基地跡の一部を公園として整備し、その一角に小高い丘が造られていた。丘の頂上には鳩を戴いた慰霊塔が、夜目にも白い姿を浮き上がらせてい

た。夜の公園は私達以外は誰もいない。所々に配置されたライトが暗い園内をオレンジ色に照らしているのも、逆に辺りの寂しさを浮き上がらせている。

疲れていた私達は、真つ暗な足元を用心深く確かめながら、転ばぬようにゆっくりと慰霊塔に進んで行った。幾つもの小さな慰霊碑が並んでいたのだが、暗過ぎて殆ど読み取ることはできなかった。慰霊塔の階段を登って献花をし、全員で慰霊顕彰の祈りを捧げる。

何か月も前からネットで慰霊塔を訪れた人のブログを読み、「何時の日か申良に行きたい。行って、彼らの飛び立った空を見、滑走路跡を歩き（現在、2本の道路となつてこの一角で交差している）、有り難うと伝えていきたい」と願っていた場所である。そこに今、現実

に自分が立っていることが嬉しかった。この申良という基地は、先程の鹿屋と合わせて、宇佐空に非常に縁の深い出撃地である。『宇佐海軍航空隊始末記―艦上攻撃機、艦上爆撃機メツカ的全貌』今戸公德著を読んで感動し、昨年2回、宇佐を訪れ、慰霊碑・建造物を巡り、慰霊の祈りを捧げてきた私にとって、鹿屋や申良は取り分け思い入れの深い場所だ。宇佐海軍航空隊からも数多くの特攻隊が前進し、これらの基地から出撃している。また「桜花」



の部隊も、宇佐空を中継基地として待機後、鹿屋から出撃している。申良の慰霊塔の左側には、出撃し散華された隊員のお名前が刻まれていた。部隊名と一人一人のお名前に目を走らせていく。「八幡護皇隊」「八幡神忠隊」が出撃していた。「八幡」と冠する部隊は、宇佐神宮の八幡大神から由来しており、宇佐空からのものだ。「あなたもここから出撃だったのですね」「あなたもここから…」と、彼らの最後の出撃地となった申良。悲しみと感謝の思いを込め、「また必ず来ますからね」と、碑に触れて別れを告げた。一番最後に慰霊塔の階段を降りていくと、先に降りた皆さんが何かを指しながら騒いでいる。何事かと驚いていると、「寺本さん、見て見て！ポールが揺れている！」と教えられた。

振り返って見上げると、慰霊塔のポールが揺れている。申良の慰霊塔にはこれを挟んで左右に国旗と海軍旗を掲揚するための2本の金属製のポールが立っていた。その内の慰霊碑側の左のポールがはつきりと揺れていたのだ。全員が見た！

辺りに風は無く、木々はそよとも動いていない。それなのに何故か左のポールだけが遠目で見ても分かる程、はつきりと揺れていた。

吉満さんは、皆が慰霊塔で献花をして祈っていた時から少し揺れているの気が付いたそう。全員が見守る中、揺れは次第に激しくなっていく。「英霊が揺らしているんだ！」皆が口々に驚きの声を発していた。「こんなの初めて見た！」「すごい！あんなに揺れている」と。

私の心の中に一つの情景が浮かんだ。若い澁刺とした特攻隊員が20人程舞い降りて来た。その内の一人がポールを掴むと、大きな声で叫び出す。「おい、みんな集まれーっ、揺らせ、揺らすんだ。俺達がここにいるってことを気付かせるんだ！ポールに掴まれ！思いっきり揺らすんだ！」彼らは次々にポールの所に集まり、よじ登り、さながら棒倒しの棒を倒すかのようにポールをゆっさゆっさと揺さぶっていく。予科練の演習時、皆で競い合っ倒していた棒のように、目の前のポールに群がりながら…。

ポールの揺れに目を奪われて呆然としている私達を前にして、三途の川のこちら側と向こう側、死者と生者が向き合って時間が止まったその瞬間、特攻隊員達が叫んでいたような気がした。「おい、俺達の声が聞こえるか？聞いてくれ！聞いてほしいんだ！日本は…俺達を守ったはずの日本は…一体

どうなっちゃったんだ？なんでこんな国になってしまったんだ？答えてくれ！俺達の死が意義あるものであったと…答えてほしいんだ！」

彼らの切なる願いに涙がこぼれるばかりだった。「後を頼む」と言って翼を振って飛び去った彼らに対し、私達戦後の日本人は何も答えてはいない。多くの日本人が彼らの事を忘れ去り、何事も無かったかのように平和を享受し、安寧を貪っている。彼らへの感謝も無く、慰霊の思いも無く、ただ日々の楽しみを追い求めて自分達のためだけに生きている。そんな戦後の日本人に対し、英霊がどんな思いでそれを見守って来たのか。言いたい事は山ほどあったであろうが、伝える術として無い。

この夜、私達は英霊の声なき声を聞いた…。双子のWさん御姉妹は大変霊感がお強い。後になってお聞きしたことで、申良に到着した時、「こんな夜遅くにお参りに来てくれて有り難う」という英霊の方々のお気持ち伝わって来たそう。有り難うだなんて…、有り難うと言わなくてはならないのは、本当は、私達守っていた国は、本当は、私達守っていた国は、民の方なのに…。それを聞いて私はまた胸が詰まる思いだった。

ポールはやがて静かに振動を止めた。英霊は確かに存在する。この国を憂

い、行く末を心配して一所懸命に私達に訴えている。強く確信させていたのだ。全員がそれを目撃し、心に刻み込んだ一夜であった。私達は英霊の御期待にお応えしなくてはならない。

## 6 来てはなりませんー万世

2日目、快晴。今日は万世と知覧を巡る。

万世は、子犬を抱いた少年飛行兵でも有名な出撃基地だ。その中の一人、千田孝正伍長のエピソードを新垣さんからお伺いしつつ、車中、若い隊員達のひたむきに出撃していく姿に思いを馳せた。「自分達がこの国を守る！」と決意して、数多くの特攻隊員が祖国のために出撃し、散華された。隊員それぞれに一つ一つの物語があったに違いない。数々の物語を見送った萬世飛行場の滑走路も、松の木々の向こうの畑や宅地の中に埋もれてしまい、海に続く公園の遊歩道として残る以外には殆ど面影も無い。彼らが見たであろう海に向かう空を写真に収め、館内に入る。血書のコーナーで足が止まった。お名前を書き留めておけばよかったのだが、どなたの遺書だったのだろうか、その遺書の中の一言を読んで悲しみが込み上げてきた。お母様への遺書らしかった。それには「こう書いてあった。」来てはなりません。絶対に来てはなりません。

せん：」と。欄外にも乱れた走り書きで「来てはなりません。来ては会えませんが」と書き足してあった。何度も何度も書いてあったのだ、来てはなりません…。

恐らくこの若者の母親は大変愛情深く我が子を育て上げ、その子もまた、それに応えて人間性豊かな男性へと成長したのだろう。我が子が特攻隊員として出撃することをこの手紙で知るやいなや、彼女が必ずどんな無理をしても我が子の元に駆け付けて来るであろうということをよく知っていたに違いない。しかし、ようやく駆け付けた時に我が子は既に出撃してしまつた後だと知れば、更にお母さんを絶望させ、嘆かせることになる。これ以上お母さんを悲しませたくないとの一心から、欄外にまで何度も「来てはなりません」と書いたのではないだろうか。

文面からは国を守るために出撃するという覚悟が、理性的に整然と認められていると共に、温かく優しい人柄も窺えた。

この手紙を受け取った時のお母様の悲しみを思うと、やはり涙なくしては読めなかつた。

## 7 戦争遺跡を巡る―知覧

知覧を訪れるのは、昨年中2度目である。前回は館内を5時間近くゆっくり回っていたので、今回は受付で戦争

遺跡マップをもらい、一人で散策してみることにした。大刀洗空や宇佐空でもそうしたのだが、当時のまま残された物を見て、その場に足を運ぶことで違うものが見えてくる。彼らが笑い、喜び、悲しみ、走り回っている姿を幻のように景色に重ねてみる。すると、過去と現在は一瞬で繋がり、彼らが今そこに生きているかのような錯覚さえ覚える。当時の空気を臆気ながら実感できるのだ。

油倉庫・弾薬庫・正門跡・給水塔・消火槽等を具に見て回り、次々に写真に収める。最後に行き着いたのが、着陸訓練装置。知覧特攻平和会館のすぐ裏手にあり、歩いて3分。なだらかな傾斜地を利用して造られた装置で、着陸する時の車輪を出すタイミングを体得するためのものだそう、高さ2m程のコンクリートの台座からワイヤーを張って模擬飛行機を吊るし、それに乗って斜め下の着陸地点まで滑り降りて行ったらしい。小石や砂利が沢山混じつたコンクリートの台座からは、既にワイヤーは外されて残っていないが、ワイヤーを固定するためのボルトが生々しく打ち込まれたまま残されていた。

触れると粗々しい砂利が露出しているので、ざらざらとして冷たかつた。この装置の周りに少年達が集まり、大空を翔けめぐる日を夢見てワイワイ

ガヤガヤ騒ぎながら、訓練の順番を待ったり、準備を手伝ったりした場所なのだろう。明るく元気な希望に満ちた彼らは、まさか数年経たぬ内に特攻出撃していくことなど想像さえしなかつただろうに…。そう思うと、再び涙せずにはいられなかつた。

## 8 静かな光の中で―三角兵舎跡

「本当の三角兵舎跡に行きたい」という私の願いを、吉満さんは叶えて下さつた。三角兵舎跡…。数多くの若者が各地から飛んで来て、眠つた場所である。遺書を書き、語り合ひ、故郷を思いながら眠りに付いた場所、そして最後の起床をして立ち去つていつた場所なのだ。柔らかな霧雨の降る静かな森の中に、それは存在した。三角兵舎そのものは既に無く、慰霊碑だけが残されていた。今はもう、賑やかな若者達の声は聞こえない。

ひっそりと朝を迎え、樹々の間の日がな一日、その身に浴びて誰からも忘れられたまま…。またひっそりと夜を迎える。その繰り返し…。三角兵舎跡は、そんな場所だつた…。

なでしこ隊が、戦争が終わり、再びそこを訪れた時には、草だけが茫茫と生え…。彼女たちが声を上げ、抱き合つて泣いたというその場所である。

寂しく佇む慰霊碑だけが辛うじて、ここに彼らが生きて存在していた事の証として残るのみである。何百人という若者が、来たるべき死と格闘し、呻吟し、家族を思いながら眠つた場所である。覚悟を決め、見送りの女学生や町の人達に笑顔で応えて旅立つた場所、戦後の日本人、現代の私達は、この場所の事を決して忘れてはならないと思う。今、私の手元には再び神坂次郎著「今日われ生きてあり」が置かれている。ページをめくると、この本の端書きには、次の言葉が記されてあった。

「俺たちの苦しみと死が、俺たちの父や母や弟妹たち、愛する人達の幸福のために、たとへわずかでも役立つものなら…」(長谷川信少尉の日記)

語り継がなければならない。守るべきもののために出撃した特攻隊員の方々の真の姿を。深い愛情と強い勇氣を胸に、国難に立ち向かつた若者たちがいたという事を。

英霊を偲ぶ3日間の旅は、改めて私に英霊の皆様への感謝と慰霊顕彰の思いを深くする機会を与えてくれた。今回のツアーにご尽力して下さいました方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。



## 9 おわりに―ホラティウス達へ

もし日本が、戦後の左翼思想・暗黒史観・自虐史観で語られて来たような侵略国家であったと言うならば、特攻隊も戦争の犠牲者と言われても仕方ないのかも知れない。

しかし、私はそうは思わない。大東亜戦争は、資源の無い日本が追い詰められた末に突入せざるを得なかった自衛の戦いであった。また、数十年から数百年に及ぶ白人支配からアジアを解放するための聖戦であり、大義はあったのだ。悠久の大義のために立ち上がった誇り高き大和魂の国、日本。日本人が、そして世界中の人々が、隠されていた真実に目覚める時、特攻隊への評価も大きく変わっていくことだろう。国家存亡の秋、祖国の為、愛する者を守る為に命を捨てて出撃していった特攻隊、若き特攻隊員たちを巡る数々の物語は、遠い未来において、必ず美しい神話となつて語り継がれていくに違いない。いや、私の中では彼らは既に、美しく輝く神話なのである。

最後に、ネット上では有名な次の詩を紹介させていただきます。

橋の上のホラティウス  
そして門の守り手

勇敢なホラティウスは言った。

「地上のあらゆる人間に

遅かれ早かれ死は訪れる。ならば先祖の遺灰のため、

神々の殿堂のため、強敵に立ち向かう以上の死に方があるだろうか。

かつて私をあやしてくれた優しい母親のため、

我が子を抱き

乳をやる妻のため、

永遠の炎を燃やす

清き乙女たちのため、

恥ずべき悪党セクストゥスから

皆を守るため以上の死に方があるだろうか。

執政官どの、なるべく早く

橋を落としてくれ

私は、二人の仲間とともに

ここで敵を食い止める。

路にひしめく一千の敵は

この三人によって

食い止められるであろう。

さあ、私の横に立ち

橋を守るのは誰だ？」

(トマス・バビントン・マコーリー)

特攻隊員の英霊の方々の御冥福を、

心よりお祈り申し上げます。

## 「英霊を偲ぶ心の旅」に

## 参加して②

会員（東京都） 渡辺 由佳

どんな方々が参加されるのだろうか、と少し緊張して、私は空港を出て集合場所とされている所へと向かった。

特攻隊員に所縁の地を訪れ、英霊たちを偲ぶ旅。行き先は都城、鹿屋、知覧、万世、指宿である。

最初に向かった都城では、旧歩兵第二十三聯隊駐屯地、郷土館、都城疾風特攻振武隊の慰霊碑等を訪れた。

郷土館では、現役自衛官の方から、この施設の当時から現在に至るまでの様々なエピソードを聞く。昔のまだという駐屯地の煉瓦造りの柱は重厚で立派だった。

疾風特攻振武隊の慰霊碑には、日頃から書籍でよく目にしてきた隊員のお名前があった。一人一人のお名前を心の中で唱えた。それだけで、もう胸が一杯になる。当時、最新鋭戦闘機四式戦「疾風」で大空を駆け巡る勇姿が目につく。

暫くワゴン車に揺られて鹿屋へと向かう。鹿屋、と聞けば、最近では話題

彷彿となった映画「永遠の0」でもよく出て来た所だ。航空基地史料館で、

復元された零戦や特攻隊員の遺影、遺

書を拝見する。史料館の前方には自衛隊機が何機も並べられており、興味深かった。

小塚公園にある立派な慰霊塔に花を捧げて暫し黙祷。その後、集落の中にひっそりと建っている「桜花の碑」に移動し、花を供える。当時、この地に居住していた報道班員が言うには、鹿

屋の特攻には悲壮感が全くなかったそう。隊員の最期へのせめてもの饒（はたけ）で

厳しい規律は作られなかったらしい。

鹿屋から申良へと移動する。申良海軍特攻隊出撃戦没者慰霊塔に到着した時は、夕暮れ時を過ぎ、辺りは既に真暗になっていた。ここの慰霊塔も天に聳えるようでも立派だ。花を供え、

皆で心を込めて合掌する。

日を新たにして南さつま市加世田にある万世特攻平和祈念館へと向かう。

建築デザインに関心のある人なら思わず「グッドデザイン賞」なる言葉が浮かんで来てしまい、そんな素敵な外観

だ。特攻隊の方たちが皆、飛行練習課程で乗ったという複製機（赤トンボ）

をイメージし、その複製機の建物に、散華した隊員たちの遺品を納めて上げた。この故苗村七郎氏の願いから出来上がった祈念館とのこと。また、その上がかった折念館とのこと。また、その殆どが「知覧」基地から出撃したとなつ



萬世特攻慰靈碑「よるずよに」

ているが、実はその内の多くの隊員は、今や何の記録も無いここ「萬世」基地からの出撃で、このままでは萬世から出撃した隊員たちは永遠に忘れ去られてしまう運命となる、と。それを案じられ、大変な努力をされて慰靈碑を建て、祈念館を造られたということである。私は戦友たちを思い遣る苗村氏に痛く心を打たれ、隊員たちの遺品や血書を静かに拝見した。

さて、次に訪れた所は、今や特攻と聞けば、神風の次くらいに誰もが連想する「知覧」である。

知覧特攻平和会館に到着して先ずは驚いた。人、人、人である。鹿児島島のツアー旅行にはここが組み込まれていることが多いそうで、観光バスで次々とお客さんが押し寄せる。もう少し落ち着いて展示を見たいと思っても展示ケースの前には、二重三重にお客さんが立ちほだかる。しかし、沢山の人が「特攻」に関心を持ち、ここで勉強す



指宿海軍航空基地哀惜の碑

るために集まるのなら、決して悪いことではない。英霊たちも休む暇も無いくらい忙しく館内を歩き回っておられたかも知れない。

この後は、鳥濱トメさんで有名な富屋食堂を復元した「ホテル館」を訪れた。ここは若い人が一杯で、トメさんの温かい想いが来観者を包み込んでいくような不思議な空間だった。

私たちは、知覧から更に南下し、開聞岳にも直ぐ近くの花瀬望比公園にやってきました。素晴らしい景色、一気に解放されたような気分になる。波の音が静かに響き、辺りを包み込む。ここから1900km先がフイリピン。曇り空の下、私は遙か彼方に散ってゆかれ



花瀬望比公園勇士の像

た47万6千余柱の英霊たちへの感謝の想いを、比島まで届けとばかりに心中で叫んだ。

最後の日は、指宿海軍航空基地哀惜の碑と鹿児島島の歴史を凝縮した維新ふさと館を訪れた。

指宿海軍航空基地哀惜の碑は細い田舎道をくねくねと進んで行った所であり、高台からの景色は非常に美しく、静かでどことなく寂しげな雰囲気もある。波の音を感じながら慰靈碑に花を供え、哀悼の誠を捧げる。

指宿から北上して賑やかな鹿児島市内へ。ここにある維新ふるさと館は、実に良く出来た幕末維新の学び場で、鹿児島の子供たちはこんな立派な施設

で自分の郷土の歴史が学べるなんて、と羨ましく思えた。

以上が今回参加したツアーの大きなスケジュールと簡単な感想である。改めて振り返ってみると、本当に楽しく有意義な日々を送ることができたと思う。英霊を偲び感謝の気持ちを持つ同じ志の者同士の旅であったが故に、どこに出向いても彼らの息遣いが感じられ、同行した皆さんの英霊に対する温かい想いも嬉しく感じられた。

特筆すべきは、申良の慰靈塔を訪れた時の出来事である。私たち一同が、慰靈塔に花を供え、感謝の気持ちを入れて合掌したところ、慰靈塔の左右に立っているボールの、特攻隊員たちの御名前が刻まれている石碑のある側のボールが、私たちに応えて下さったかのように、ゆさゆさと揺れ始めた。全くの無風、車や人も来ない、私たちがけが竹むその場所で・・・皆不思議そうに見詰めると、ボールは更に激しく揺れ出した。「これは英霊が喜んで下さっているのではないだろうか」と一人が口を開くと、「きつとそうに違いない。英霊が我々を歓迎して下さっているのだと思う」、「来て良かった。本当に良かった」と、皆感慨深げに話しながら慰靈塔を後にした。

私は、この時の参加者の皆さんのお



顔の表情を思い出すと、今でも泣きそうになる。あれほど穏やかで素敵な笑顔を私は見たことがなかったからだ。

また、会館に並べられていた特攻隊員たちの凛とした御姿、祖国を想う熱烈な遺書、家族に宛てた愛情溢れる最期の言葉、魂の叫びのような血書、私はそれらをしっかりと目に焼き付けて帰ってきた。

平和で、自由で、物資も娯楽も何でもある現在の日本。ここにあらうかいてのうのうと暮らすのはもう止めよう。今の日本はある日突然ポンと出てきたわけでも、自然に湧いてきたわけでもない。特攻隊員を始めとする多くの兵士たち、そして彼らを支えた数々の国民の礎の上に今があるのだ。私は英霊の遺影の前で次のように伝えた。

「特攻隊のお兄さんたちが我が身を捨ててまで護りたかった日本は、今やこんなにも繁栄して続いています。平和な国になりました。平和であるということは、とても尊いことであるけれど、平和過ぎてへっぴり腰になり過ぎるのもまた好ましくないのではないかと思います。お兄さんたちが勇敢に戦って下さってから70年近い歳月が流れましたが、お兄さんたちの死が無駄になるような事は誰にもさせません。今度は私たちがお兄さんたちを守りま

す。どんな事があってもお兄さんたちのことは忘れません」と。

この旅を終えて、私は今まで以上に英霊顕彰に力を入れ、彼らに恥じることなない人間になりたいと心から思っただ。そして、自分の国にもっと誇りを持ち、日本が好きだという人々で満ち溢れた健全なる国家の構築に力を捧げたいと意を決した次第です。

最後に、素晴らしい思い出を作った下さった参加者の皆さんとこのツアーを企画して下さった方々に心から感謝いたします。

### 《読者の声》

## 軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭から思うこと

野村 光司（陸士61期）

「編注・毎年4月第1日曜日は、靖國神社の主催（偕行社協賛）による「軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭」が、遊就館前の三慰霊像前で執り行われる。そのことに関する次のような投稿があった。今年も4月5日（日）に第4回軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭が斎行される。是非大勢の方々に御参列願いたいものである。」

この春、陸士61期生会幹事会の席上

で、広報委員長の飯田正能君から、靖國神社の第3回「軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭」の話の聴き、私は動物愛護にいささか関心があるが、軍馬、軍犬はともかく、鳩にまで武士の愛情が注がれ、靖國神社で懇ろに慰霊祭が執り行われていることを知らなかったので、感慨を覚えて私も関連した数分のスピーチをさせて頂いたが、以下は私の動物愛護に関連する日頃の想いである。

私は軍の学校に入ったものの、実は幼い時から殆ど生き物を故意に殺したことがない。小学校や中学校の理科で動物、植物の採集、実験の課題があったが、私はカエルの解剖などを嫌いだ。昆虫採集で生き物を捕らえ、殺して標本にすることをよしとしなかった。そこで植物に親しみ、今日までその趣味は続いて、各種同好会に入り、野外の観察会にも出掛けている。若いときは「胴乱」といつて、摘み取った植物が直に枯れないよう金属製の箱を携帯したものだが、年を取るにつれて仏心が進んで、葉の一枚も取らず、良く覗んで家に帰って思い出して図鑑を調べるだけだ。今も仲間たちは、誰も標本を採集せず、写真に撮るのが普通のことになっている。

生き物を殺さない私だが、調理された肉は食べている。クジラだって戦後

暫くは、クジラペーコンに独身生活の間、良くお世話になった。先程、日本の「調査捕鯨」は商業捕鯨の偽装であると、国際司法裁判所のお咎めの判決があった。原告のオーストラリアではカンガルーの肉を食べている。幕末の開国要求も、そもその理由は、アメリカの捕鯨船の寄港地を日本に確保することだった。日本はクジラのすべてを利用するが、彼らは鯨油だけ絞って他の部分は捨てていたはずだ。

水と塩以外の口に入れる飲食物は、すべて他の命を奪った結果なのだが、食習慣によって世界それぞれで、どうしても一貫した「論理？」原則は立てられない。私の考えでは、人間、食べなければ生きて行けないのだから、食べるための殺生は（神から）許されていると思う。食べないで捨ててしまつたら、それは無駄に殺生したことになるのだ。私は、戦争中の飢えた時代は当然で、今でもほぼ絶対に食べ物を捨てない。家内は年齢が進んで記憶力が衰えているのだろうか、買って冷蔵庫や保冷庫にしまったのを忘れて、また同じものを買ってきて、冷蔵庫も保存食品の貯蔵庫もこれらで満ち満ちている。戦後の飢えた日々はブロンディの漫画で、冷蔵庫が満杯で、ダグウッドといった夫が冷蔵庫から勝手にご馳走

を引き出して食べるのを羨んだ記憶があるが、今は欲しい物は何でも揃う幸せがある。ひと月ほど前、家内に嫌がられながら在庫整理をしたら、数年前に消費期限が切れた保存食品、数カ月前に切れた冷蔵食品がわんさと出てきた。私はこれを皆食べた。3年前のチーズは青くなってカチカチで歯が立たないので捨てたが、他は腐った匂いも舌が刺される有毒感もなかったので皆食べたが、味も悪くなく、腹痛も起こさなかった。

かつて陸士の監事(副校長)閣下に「何をお食べになりますか」と聞いたら、「軍人は何を食いたいと要求してはならん、兵站から提供されたモノを感謝して食うんだ」と諭されたという話を伺ったことがあるが、私も家内に何を食いたいと言ったことはない。出された物を旨い時は「旨い」と言い、不味い時は黙っている。しかし、肉ではやはり牛のステーキが旨いが、余り食卓には上がらず、トリ、ブタ、卵、魚が多い。肉にされる家畜も、殺される瞬間までは快適なものにしてやって欲しい。昔は、貴重だったタマゴだが、今は安い。バッテリー養鶏法とか、ケージ養鶏法とか言う、体がやっと納まる狭い箱に入れられ、運動も許さず、卵だけを生まされ、それを取られて生涯

を送るめんどりは哀れだ。アヒルに無理やり餌を押し込んで肝臓を肥大化させたそうだが、バッテリー養鶏も何とかならないだろうか。近所の地主さんの広い庭には鶏が十数羽いて、自由に運動し、夜は庭の木に止まって寝ている。ああいう養鶏法で卵がどれくらい高くなるのだろうか、毎日食べられなくても、そうできないものかと思う。

さすがにイヌを食う習慣は日本人にはない。天武天皇は、天武2年(西暦675年)に食肉禁止の詔を発した。「自今以後、莫食牛馬犬猿鶏穴、以外不在禁制、若有犯罪之」(今日以後、ウシ、ウマ、イヌ、サル、ニワトリの肉は食ってはならない。それ以外は構わない。禁を侵す者は罪にする)と。前後の事情、5種類を選んだ理由も明らかではない。牛馬は人間の農作業を力役で助けてくれる、イヌは当時からman's best friend、サルは人間に似ている、ニワトリは朝、トキを告げて働き時を教えてくれる、と理解されている。愛猫家はネコは食べられたのかと心配するが、当時日本にネコはいなかったのだ。ずっと後に中国から入ったのである。この詔は、わざわざ他は食べてもよいと言われているから、動物愛護の精神は乏しい。ウサギ、タヌキ、

シカ、キジ、何でも食べていただろう。

日本で動物を食わなくなったのは、仏教伝来からだ。「一切衆生悉有仏性(生きとし生けるものすべてが仏になる尊い命がある)。2年ほど前、

Foreign Affairs 誌にAnimal Welfare

の論文があつてそこにも我が将軍徳川綱吉が動物愛護で誉められていたが、綱吉の動物愛護は、彼自身の儒教的な「君主の聖徳は禽獣に及ぶ」と、生母桂昌院とその寵愛する僧隆光の、綱吉に世継ぎが生まれぬことについての、

仏教に借りた取り入り策でもあるようだ。それでも徳川幕府は軍事政権ながら、動物愛護の政策をしばしば出している。民草にも結構、優しかったと言える。仏教の五戒の第一は不殺生戒で、最後の五番目の「不飲酒戒」などは「般若湯」と偽れば飲めたが、第一の不殺生戒は良く守られた。旧約聖書のモーゼの十戒では第一が「エホバの他、何物をも神とせず」で、「汝、殺生するなかれ」は六番目だ。インドのジャイナ教徒の不殺生戒は凄しい。道を歩くにも虫を踏み殺さぬよう、息をするにも蚊を吸い込まぬよう気を付けるそうだ(口の中に入ってくるドジな蚊っているのかな。)。先程紹介したAnimal Welfare

の論文は、痛みを感じている生物には、痛みを与えない努力をすべきだという

のが結論だったようである。貝には脳が無いそうだから多分、痛みは無いだろうが、捕まえようとして一生懸命逃げる動物は皆、痛みを感じ、死を恐れる感情があるのではないかなと思う。

日本にも動物愛護法ができた。そこで愛護すべき動物とは「哺乳類、鳥類、爬虫類」となっている。短い任中に13人もの死刑囚の死刑執行命令を出された法務大臣は、膨大な蝶の標本をお持ちだが、どちらも全然適法である。

靖國神社が、哺乳類、鳥類である軍馬・軍犬・軍鳩の慰霊祭を執行するのも、全く法に適った精神なのだ。

ハンニバルの象部隊、アラビアのラクダ部隊があつたし、それに今も海軍でイルカの使用を考える国もあるが、最早戦争で鳩を通信に使うこともないし、馬で運ぶこともない。無人機が飛んで、人が戦争をすることも殆どなくなるかもしれない。

今は平和だ。イヌはネコと共に一般市民のBest friendだ。少子高齢化、生涯単身者、核家族化で、イヌやネコを家族として癒されねばならない人たちがどんどん増える。死ねば人間と同じ、葬儀、火葬、納骨、墳墓を備えた立派な施設が大いに増えている。我が住む家の近く、仙川を下ったところに人間の寺院の大半を領して、立派な



ペットの葬儀場が出来た。深大寺にも、高尾山にも古くからある。両国の回向院の境内にもある。

このイヌの肉を食べるのが中国、韓国、ベトナムだ。清末、イギリスの外交官が清の高官にイヌを贈った。その後外交官が「あのイヌはいかがしていますか？」と聞くと、高官は「ありがたい。大変おいしかった」と答えたとか。先だってドバイに住むイギリス系の知人の女性がフェイスブックで動画を送ってきた。「狗肉店」の看板が出ていて、店の奥の鉄檻の中に大きなイヌが十数匹いる。男が大きなヤットコのようなもので一匹の首を挟んで引き出す。檻の中のイヌたちは彼と自分たちの運命を知って、物凄いわんわんに陥っている。外に出してから棍棒で頭を何度も叩く。叩く度に「ギャーッ」と、断末魔の叫びをあげる。十数回、叩いて動かなくなつてから煮え立つ大釜に入れられる。動画は、中国政府にこれを止めさせる署名を求めている。

にいた時、私の散歩にいつもイソイソとついてくる野犬がいた(当時は野犬も自由に歩けた)。ある朝の散歩でそのイヌがいつものように足取り軽く後ろを歩いていた。三滝川の河口の大きな橋を渡った時、後ろで「ギャーッ」と声がした。振り向くとトラックにイヌが腰を轢かれてうめいている。運転手が降りてきて、「あなたのイヌですか？」と聞く。私が飼っているのではない野良犬だから「いいえ」と答えた。彼はうめくイヌの首を掴んで橋の上から川に放り込んで去っていった。私が呆気に取られた一瞬のこと、イヌはのたうちながら伊勢湾の沖遠く流れ去った。私を慕ったが故に殺され、流されたイヌに今も申し訳ない気持ちがあつた。その運転手は善良そうな中小企業のオヤジといった感じの男であつた。アメリカの銃器製造者は「ピストルは人を殺さない。人が殺す。」と言う。私は「人は殺さない。ピストルがあれば、自動車があれば人を殺す。」と確信している。私は自転車で、女性に見とれて電信柱にぶつかったことはあるが、人を傷つけたことはない。

30年前、日航のジャンボ機が御巣鷹山で墜落して524人の乗客・乗員を死なせてしまった。その後毎年、夏になると日航機が524人殺したと報道される。しかし自動車は、この30年間に数十万人を殺し、百万人以上に大怪我をさせ、多くの家族の限らない悲しみがあつた。シンドラーのエレベーターが一人死なせた。パロマの湯沸かし器で一人死んだ。マスコミは長く仰々しくメーカーを責めた。御巣鷹山の事故以後、航空業界は安全に努力して30年間、一人も死なせていない。自動車は数十万人を殺し、排気ガスで年々真夏の炎熱は耐え難くなり、熱中症により救急車で運ばれる人が数百人、増えるばかりだ。マスコミは自動車会社の責任を全く問わない。問われるのは、お客にサービスしたバーのママさんだ。自動車会社の責任を報道すると、「広告料は要らないのか」と凄まれるそう。天文学的な利益を上げながら、売り付けた自社の製品で死んだ人の慰霊祭をやっているか。日航は毎年夏に慰霊登山をしていた。消費税導入の第一の賛成者も自動車会社、7割を輸出の儲けには、消費税が還付されるのだ。使い捨ての日系人労働者を導入したのも、下請けいじめのジャストインタイムも、悲劇の不定期労働者制度も、自動車会社が音頭をとって導入されたと思う。国を挙げて高速道路を造り、道路舗装をし、益々自動車が売れるようにする。省エネの鉄道も船舶も、そ

して自動車の中では罪が軽いバスも廃れるばかりだ。自動車会社は超ブラック企業だと私は思っている。拳母町は、トヨタ市と改称された。日本も「トヨタ国」と改称されねばよいが。「トヨタ国憲法」では、戦争被害と同じく「自動車で何人殺されても国民等しく受忍しなければならぬ」と書かれることだろう。数百年に一回の東日本大震災で亡くなった人は2万人、それは、自動車が2年毎に出す犠牲でしかない。我慢すべきだ。TPPはもちろん、自動車が沢山売れるためには、日本の農業も医療も何も当然、犠牲を忍ぶべきなのだ。私を愛したが故に殺されたイヌを悼んで(実は、性格も容貌も本当に素晴らしかった、素敵な知人のレディも、自動車で轢かれて無残な死を遂げている)、私は自動車を持たない。外出にも鉄道には乗るが、タクシーもバスも使わず、万歩計を携帯して殆ど毎日、1万歩程歩く。お陰で健康、食べる物は皆美味い。以上、取りとめの話を書き長々とし、纏まった結論は得られず、申し訳ない。我々の死後がどうなるか、確たることは全く分らないと同様、生き物の生命をどう扱ったらよいか、決定的な理解は誰もできないのかも知れない。(平成26年5月5日記)

# 新刊図書紹介

丸谷元人著

『日本軍は本当に「残虐」だったのか——反日プロパガンダとしての日本軍の蛮行——』(株)ハート出版・平成26年12月17日第1刷発行・A5判285頁・定価本体18000円)



著者の丸谷元人氏は、1974(昭和49)年生まれの少壮気鋭のジャーナリストである。氏は学生時代オーストラリア国立大学に学び、卒業後、更に同大学院博士課程に進んだが中途退学し、オーストラリア国立戦争記念館の通訳・翻訳者を皮切りに、長年通訳・翻訳業務に従事し、この間パプアニューギニアで幾つかの現地企業を設立する等して活動するかたわら、コメディネーターとして海外大手テレビ局の番組制作にも参加し、2004年には、オーストラリア国営放送の元チー

フ・プロデューサー、クレイグ・コリーと共同で、ニューギニア戦に関するドキュメンタリー番組「Beyond Kokoda」を制作。同作品が2008年9月、オーストラリア及びニュージーランドで一斉に放送されて大反響を呼び、2009年度のオーストラリア映画祭で、ドキュメンタリー部門最優秀作品賞を受賞した。それを書籍化したクレイグ・コリーとの共著『ココダ——遙かなる戦いの道——』(株)ハート出版・平成24年5月発行・定価本体3200円)は、A5判504頁に及ぶ大著であるが、日豪両軍の多くの元兵士に取材し、スタンレー山脈のココダ街道からブナ・ゴナの死闘に至る壮絶な戦いの全てを描き尽くし、豪軍をして世界最強の抵抗と言わしめた、我が南海支隊を中核とするポートモレスビー作戦の全貌を新たな視点で綴られている感動の著作である。

また、最近、南シナ海の領有権問題に関する中国の強硬策、パプアニューギニア、ミクロネシア等への経済的進出、漁港・空港整備等への積極的な支援等によって、将来、中国軍の拠点進出の怖れが増大してきたこと、それらによって、我が国の生命線とも言えるシーレーンの維持が危険に晒されようとしている現実から、俄かに注目されるようになってきた日本の南洋戦略についても、その著『日本の南洋戦略——南太平洋で始まった新たな(戦争)の行方——』(株)ハート出版・平成25年7月発行・A5判413頁・定価本体1900円)により、夙に、現地での経験・知見を通しての様々な提言を行っており、頭書の著書と共に是非一読をお薦めしたい。

さて、頭書の著書は、韓国による執拗なまでの「従軍慰安婦問題」、中国による「南京大虐殺事件」を始めとする反日プロパガンダとしての日本軍の蛮行が、アメリカにおいて、国連において、今や世界的な反日プロパガンダとして横行し始めている。日本人の誇りと先人達の名誉を傷付けるため、次々と繰り出されるこれらの反日プロパガンダ、その実態はどうなのか、これに対して我々日本人はどのように対処すべきか、世界的な反日勢力の嘘を如何にして論破すべきか等々、豊富な翻訳者としての経験と、気鋭のジャーナリストとしての鋭い観察から、この問題に挑んでいる。

著者はまず、本書の「はじめに」の中で、次のように述べている。

「・・・日本は戦後、「東京裁判史観」なるものによって多大な被害を受けてきた。そして、占領軍が勝手に作った平和憲法なるものを今日も堅持し、五〇万人以上の民間人が命を落とした無差別都市空襲や二発の原爆は、私たち日本人がアジア各地で行った蛮行や、アメリカへの宣戦布告なき奇襲、そして連合軍捕虜たちへの虐待の結果もたらされた「当然の帰結」であり、我々こそがその罪を未来永劫、背負っていくねばならないのだとする「プロパガンダ」が蔓延した。教育界はそれを子供たちに躍起になって刷り込み、メディアもその発信に大きく加担した。その結果、多くの日本人が本物の自信を喪失し、一部ではヘイトスピーチなるものが発生するごとく、品格なき領域へと墜落していく若者たちも現れ始めている。かつて、日本人の大半が当たり前のように持っていた「立ち居振る舞い」が失われているのだ。

その一方で、今日でもなお、アメリカや韓国、中国を発信源とする対日戦争プロパガンダはさかんだ。いや、見方によってはどんどん激しくなっていると見えるかもしれない。今年(二〇一四年)のクリスマスには、人気ハリウッド女優のアンジェリーナ・ジョリーが監督を務める『アンブローカーン』という映画が全米で公開されるが、こ

こでも日本軍は、サディスティックな看守を使って捕虜を散々に虐待する



「悪役」として登場するようだ。この映画は同名の書籍を基にして作られており、その中には、相変わらずの戦時プロパガンダのオンパレードと、相手が日本人であれば何を言っても許されるという態度で書かれたに違いない誇張が、随所に見られる。

本書では、映画の原作本『アンブロークン』の中に登場するそんな日本人軍からの描かれ方が、いかに一方的かつ個人的なものであるかを強調し、かつ、無謬とは言わずとも、連合軍（特に米英軍）が日本軍に比べてはるかに人間的であったとする「神話」に挑むため、それらの国々の軍隊が行った数々の蛮行を記述している。しかしこれは、あまりにバランスを欠いていたこれまでの「常識」を覆すための作業であり、決して、返す刀で日本軍は無謬であり、一〇〇パーセント正義であった、とするものではない。……

タイ王国のある新聞記者は、真珠湾攻撃の日に自らが創刊した『サンヤム・ラット』紙上で次のような記事を書いた。「日本のおかげで、アジア諸国はすべて独立した。日本というお母さんは、難産して母体をそこなったが、生まれた子どもはすくすくと育っている。今日、東南アジアの諸国民が米英と対等に話ができるのは、いったい

誰のおかげであるのか。それは身を殺して仁をなした日本というお母さんがあったためである。一月八日は、われわれにこの重大な思想を示してくれたいお母さんが、一身を賭して重大な決意をされた日である。われわれはこの日を忘れてはならない」ククリット・プラモートという名前のこの記者は、後にタイ王国第一八代首相となった。

（また、本書に後出のマレーシアのマハティール首相は、一九九二年一〇月一四日に開かれた「欧州・東アジア経済フォーラム」においてこう語った。「日本の存在しない世界を想像してみたらよい。もし日本なかりせば、ヨーロッパとアメリカが世界の工業を支配していただろう。欧米が基準と価格を決め、欧米だけにしか作れない製品を買うために、世界中の国はその価格を押しつけられていただろう。（中略）

もし日本なかりせば、世界は全く違う様相を呈していただろう。富める北側はますます富み、貧しい南側はますます貧しくなっていたと言っても過言ではない。北側のヨーロッパは、永遠に世界を支配したことだろう」と。）

東南アジアや中東、アフリカ諸国には、このような感覚を持つリーダーが数多くいる。

また日本国内の一部でも引き続き強力に支持される「日本＝悪玉論」と、これらアジアをはじめとするその他の国々の人々が持っている感覚のギャップの狭間で、当時の日本人がいったいどのように生きたのか、そして今後の我々日本人がどのように振舞うべきなのかの考察を試みたのが本書である。日本人は多くを反省しなければならぬ。しかしその反省とは、東京裁判史観に基づいて一方的に指摘される「罪」などではない。あの戦争で確かに多くの失敗をしたとされる日本人が、その一方でいったい何を考え、またどんな「正義」を信じていたかという考察さえせず、また戦勝国のプロパガンダにただ乗りすることで、次の若い世代にまで自己反省と外国へのへつらいや謝罪を強要してきた、戦後日本社会の在り方についてである。本書によつて、少しでも多くの人が、今日まで日本社会を覆ってきた様々なプロパガンダの嘘に目覚め、品位と誇りある日本を取り戻すための活力を得ることができたら、これに勝る喜びはない」と。

また、著者は本書の中で、捕虜虐待をめぐる問題を取り上げ、多くの事例を基に連合軍捕虜たちに対する日本人の態度や、連合軍による捕虜収容所関係者への仕打ち、取り分け日本人戦犯に対する凄まじい虐待について書いているが、涙なしには読めない部分もあることを付記しておく。

是非御一読をお薦めしたい。  
（飯田正能記）

○発行所「株式会社ハート出版」  
〒171-0014  
東京都豊島区池袋3-9-23  
TEL 03-3590-6077  
FAX 03-3590-6078

### 特攻隊に関する新聞記事の紹介

昨年は、組織的な特攻作戦が始まったから70年という節目の年であった。即ち、昭和19年10月25日、関行男大尉の指揮する神風特別攻撃隊敷島隊が、フィリピン・ルソン島中部のマバラカット飛行場を飛び立ってレイテ島沖の米機動部隊に突入し、最初の大戦果を上げた日であり、以後陸海軍の航空特攻を始めとする各種特攻作戦が展開された。それに関して、各新聞紙に、特集記事が掲載されたので、その中の2件について次に掲載する。

# 特攻の姿娘と伝える

## 資料館開くフィリピン男性

### 戦後70年を前に

【マニラ＝佐竹実】「いい。平和を願う親子2代世界大戦末期、神風特別攻撃隊が初めて米軍艦に突撃してから25日で70年がたつ。第1号機はフィリピン北部の飛行場を飛び立った。当時を知る世代が少なくなるなか、特攻隊員と交流経験のある現地の男性が、次を、マバラカット近郊に女と二人三脚で歴史を伝える資料館を運営する。」

「戦地で命を落とした若者の姿を通じ、戦禍の記憶を後世に語り継ぎたい。」

米国占領下のフィリピンに侵攻した日本軍は1

【マニラ首都圏から北に約100キロのパンパンガ州マバラカット。飛行場から白い鉢巻き姿の兵士が戦闘機で飛び立つ様子がある。】

「優しかった隊員」

「平和を願う親子2代」

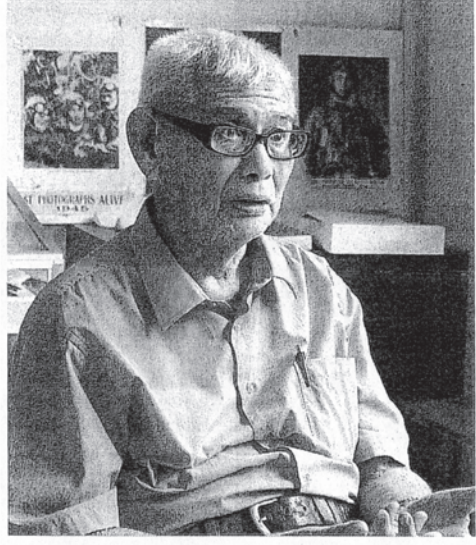
「神風特別攻撃隊が初めて米軍艦に突撃してから25日で70年がたつ。」

「第1号機はフィリピン北部の飛行場を飛び立った。」

「当時を知る世代が少なくなるなか、特攻隊員と交流経験のある現地の男性が、次を、マバラカット近郊に女と二人三脚で歴史を伝える資料館を運営する。」

「戦地で命を落とした若者の姿を通じ、戦禍の記憶を後世に語り継ぎたい。」

米国占領下のフィリピンに侵攻した日本軍は1



神風特攻隊についての思い出を語るマニラ・ディオンさん

## 交流で気づいた葛藤

▼特別攻撃隊 第2次大戦末期、日本軍は操縦士を乗せたまま敵の軍艦に体当たりする特攻作戦を考案した。1944年10月25日、マバラカットから飛び立った戦闘機が、レイテ島の米戦艦に初めて体当たりした。

鎌倉時代の元寇(げんこう)を撃退した風になみ(神風)と名付けられた。鹿児島県知覧などからも出撃し、航空特攻による死者は約4千人、人間魚雷の「回天」なども合わせて約6千人が死亡したとされている。



942年に同国の全土を支配した。日本軍の駐屯地で雑用などをしていた10歳代のディオンさんは、次男に兵士らとの交流を深めるようになる。

絵が得意だったディオンさんに上質の紙をくれた将校や、おにぎりを渡してくれる兵士もいたが、日本の戦況悪化が濃厚になった44年ごろから、若い兵士が戦闘機に乗り込む姿を目にし始めたという。

戦後、フィリピン大で高まった。ディオンさん自身もマバラカットを飛び立つ若い兵士たちが、特攻

機でレイテ島の米軍艦に突撃したと知った。「自分に優しく接してくれた若者は特攻隊員だったのか」と胸が締め付けられる思いだった。

肖像画など展示

第2次大戦の激戦地だったフィリピンでは、日本兵約50万人のほか、フィリピン人約100万人が死亡した。大部分が民間人だったことなどから、当時の反日感情は高まった。

ディオンさん自身も自宅を日本軍に奪われた。それでも子供のころの交流を思い出し「人間味のあった彼らが好きこのんで戦地に立ったわけはない。兵士にも葛藤があったはず」との思いを強くするようになった。

人間同士が殺し合う戦争の悲惨さを、若くして命を失った兵士の姿とともに伝えたい。ディオンさんは、特攻隊員の写真や戦闘服といった遺品などを集め、70年代に自宅に資料館を開いた。

現在増築中で、自ら描いた特攻隊員の肖像画なども展示し、訪れるフィリピンや日本の学生らに経験を語り継ぐ。

ただ、寄る年波には逆らえず、最近では病院に通ったり自宅床に伏せたりすることも多くなった。そんなディオンさんの活動を支えるのは次女のマヤさん(43)。展示物について説明するディオンさんをそばで見守る。

「私にとって資料館は既に人生の一部になっている。父の情熱を受け継いで日本人にも知らせていきたい。語り部としての役割も受け継いでいけよう。」



# 風特攻隊から70年 英霊が私たちに託したものは

## 特攻隊をめぐる経過

昭和	主な出来事
16年 12月8日	真珠湾攻撃で日米開戦
17年 6月	ミッドウェー海戦で大敗。空母4隻と戦闘機多数を失う
8月	ガダルカナル島の戦い(18年2月まで)。多数の病死・餓死者を含む2万人超の死者を出して撤退
18年 10月	東京の明治神宮外苑競技場(現国立競技場)で出陣学徒壮行会
19年 7月	「絶対国防圏」のサイパン島陥落。多くの民間人も自決
10月20日	レイテ島に米軍上陸
25日	レイテ沖海戦で関行男大尉ら神風特攻隊「敷島隊」が特攻作戦実行
20年 3月	沖繩戦開始。以降、特攻作戦が数多く実行される
8月6日	広島に原爆投下
9月	長崎に原爆投下
15日	終戦



● フィリピン・マバラカット飛行場から飛び立つ特攻機を見送る人たち



旧日本海軍の「神風特別攻撃隊」が初めての攻撃を実行してから、25日で70年を迎える。特攻隊戦没者慰霊顕彰会によると、特攻による戦死者数は6418人。彼らは何を思い、その後の日本人に何を託したのか? 元特攻隊員の言葉などから英霊の思いに迫る。  
(編集委員 宮本雅史)

## 戦後70年

句で片付ける前に、生への執着を断ち切るまでの想像を絶する努力と決断があったことは想像に難くない。ところが、軍神と崇められた特攻隊員に対する賛美は敗戦とともに影を潜め、遺族を取り巻く環境も一変した。関大尉の母、サカエさんも、「軍神

がにっこり笑って死んだらじゃ。そんなのは日本しかない。日本人は誇りに思わにゃあいかん。それを教えないから、今の子供はのうとうとしている」

▼「俺たちやらんで誰が」  
特攻作戦はその後も、陸、海軍が沖縄戦などで大規模に展開した。沖縄に向けての出撃前に終戦を迎えた元陸軍特攻隊員で第194振武隊長だった堀山久生さん(91)「陸軍士官学校57期」は「国が負けかかっているときに、俺たちがやらんで誰がやるか。やらなきゃいかんです。そうしなければ国が滅亡する」と振り返る。

# 「忘れず、誇りに思いつて」 6418人の愛 壮絶なる青春

毎年10月25日、愛媛県西条市の檜本神社で、「神風特攻隊敷島並びに愛媛県特攻戦没者追悼式典」が開かれ、今年で40回を数える。

このやり取りを回想録「神風特攻隊出撃の日」の中でこう記す。

『報道班員、日本もおしまいだよ。ほかのような優秀なパイロットを殺すなんて』『ほかは最愛のKAのために行くんだ。命令とあらは止むをえない。ほかは彼女を護るために死ぬんだ。最愛の者のために死ぬ。どつたすばらしいだろうー!』

など戦果を挙げた。当時の新聞は朝刊1面で「身を捨てて国を救わんとする皇軍の精神である

海軍用語で妻を指し、その言葉からは苦渋に満ちた決断が伝わる。

の母」からいつしか「戦争協力者の母」という批判を浴びせられる。

訪れる人もなく、衣類を闇米に代え、草餅を作って売り歩いた。晩年は西条市の小学校に住み込みで働き、昭和28年11月、還暦を前に亡くなる。意識が混濁する床で、「行男の墓を建ててくださ」とつぶやいて息を引きとったという。

サカエさんが亡くなった際、戦時中は「軍神の母」につきまとい続けた新聞記者が、「そんなもの記事になりませんか。軍神がなんですか」と吐き捨て

たという。戦局悪化の中、軍上層部には脳漿を絞る者も、的確な判断を下す者もいなかったのだろうか。

人間魚雷・回天を考案した黒木博司大尉(当時の22)、殉戦後に少佐は戦友に「中央の怠慢は国賊というの外な

がにっこり笑って死んだらじゃ。そんなのは日本しかない。日本人は誇りに思わにゃあいかん。それを教えないから、今の子供はのうとうとしている」



平成26年(2014年)10月23日 木曜日

産

# 神

る」と報じた。

関大尉は命令を受けた際「ぜひ、私にやらせてください」と承諾したとされるが、報道班員だった同盟通信の野田政特派員は、出撃を控えた関大尉

## ▼「軍神の母」孤独な最期

特攻隊員の愛する者を守り、国の行く末を案じる気持ちが行動の芯であったのはまぎれもない事実だが、美辞麗

るよつひに言ったという。

自身も海軍特攻隊員で、出撃前に終戦を迎えた「敷島隊」軍神 愛媛特攻戦没者奉賛会」会長の寺田幸男さん(88)は、英霊への感謝の気持ちを奪った当時のメディアとそれに醸成された世論は戦後の日本の姿をゆがめたという。成人式が済んでいないような若者

## ▼「今の日本を見ると…」

戦後70年近くたった日本の姿にいちだちを感じる関係者も多い。鹿児島・知覧飛行場から沖縄に出撃して散華した元陸軍特攻隊長の婚約者だった女性(95)「岐阜県」は最近、「あの人たちは何のために死んだのかしら。あの人の姿を思いを日本人は忘れてしまったのかしら。今の日本を見ると、かわいそうで仕方がない」と涙を流す。鹿児島・万世飛行場から沖縄に出撃して散華した陸軍特攻隊員の妻は「隊員の多くは子供たちに古事記を読ませるように言い残すなど教育の大切さを説いた。戦後、わが国は経済面で世界の牽引国に成長したが、何か、大切なものを忘れてしまった」という。戦後70年を経た日本人がこれから、どのような日本を構築するのか。英霊は現代の日本人にそう問いかけている気がする。

## 特攻で使われた主な兵器



零式艦上戦闘機(ゼロ戦)

レイテ沖海戦の神風特攻隊でゼロ戦を使用

東京・靖国神社遊就館に展示されている零式艦上戦闘機52型

### 桜花

攻撃機の胴体に取り付けられ、目標を捉えたと切り離されて滑空した



沖縄で日本軍が遺棄した「桜花」(米海兵隊提供)

### 回天

人間魚雷。潜水艦で敵艦近くまで運んでから発進。操縦可能で水中を潜航した



山口・大津島に展示されている「回天」の模型(回天記念館提供)

### 震洋

モーターボートによる水上特攻。ペニヤ板製で車のエンジンを流用



米海兵隊が撮影した「震洋」とみられるボート(AP)



沖縄沖で神風特攻隊機の攻撃を受け、炎上する米空母バンカーヒル(米海軍ホームページから)



飛行服に身を包み、出撃前の打ち合わせをする特攻隊員ら 昭和19年12月

## ハチの一刺し—特攻精神と武士道と『葉隠』に学ぶ—

陸士61期 飯田 正能

『乱世の帝王学』『ビジネスに活かす

葉隠の知恵(いづれも産業能率大学出版部発行)など主としてビジネス関係図書を多く著述されている作家の青木照夫氏は、養蜂家でもある。約百群ほどのミツバチを飼っている。ミツバチの行動を観察していると、多くの示

唆に富んでいるという。働きバチと雄バチ、女王バチらの責務は厳然と区別されている。女王は卵を産むのみ、働きバチは養育と、蜜と花粉を集めることに専念する。雄バチは交尾するだけ。誠にうまく分業されており、効率よく

種と子孫を保存するシステムが作られている。最も進化した社会性昆虫であるという。以下は、青木照夫氏の所論に拠った。今の世の中では、男女共同参画から、ジェンダーフリーなど、競って男女の



共同性を主張しているが、どこか変調を来しているのではないか。男女の区別が曖昧になったことは、物事のけじめが希薄になったのと並行している。何でも同じにすることが平等という錯覚に陥っているのである。法律上の権利と、肉体上の差異とを混同しているのだ。そこからすべての価値体系が混乱を来しており、それは同時に人間性の崩壊に繋がっているのだ、ということである。

男女共同参画において、一見、子育ての重要性を説いているようであるが、実はその逆であって、それぞれの責務が軽視されているのではないか、育児という大仕事を重く見ているのではなく、軽く見ているから共同という錯覚が生まれるのだ。子育ては重いか、そこそ母親以外には為し得ない。そこるところを理解していないから安易に共同ということになるのである。そんなことは、子供の立場に立ってみればすぐ分かることである。子供が手を差し出す方向は、常に母親である。何故そうかといえば、子供を産んだのは母親であるからだ。それ以外の理屈は要らない。それが、生物・動物の論理なのだ。ところが、甘やかされ、褒められることが当たり前だと思つて育つたから、頭でっかちになり、少し苦し

なれば捨てるのか、殺すか走る。その仕返しとして、子供が反乱する。ミツバチと同じようにしろ、とは言われないまでも、その根本を良くわきまえて、それぞれの責務に全力で取り組まなければならない。人間社会も崩壊への道を辿ることになる。大東亜戦争の敗戦により日本が崩壊し、その後60年にわたる努力によって再建を成し遂げたが、そこから方向感覚が麻痺し、「そんなの関係ない」とばかりに喧騒と軽薄が蔓延している。目を凝らし、耳を澄ましてみると、確実に停滞と崩壊のきざし

が日本を覆いつつある。しかし、日本民族はいかなる国難、困難をも克服し、輝かしい未来を切り開く英知を生み出してきた。その原点には何があつたのだろうか。ミツバチの行動をつぶさに観察していると、「武士道とは死ぬことと見つけたり」を日々実践していることに気が付く。外敵が来ると、働きバチは一斉に攻撃して行く。いかなる迷いもなく、相手に「一撃」を食らわすのである。ミツバチによる神風特攻隊である。一撃は同時に自己の命を失うことを意味する。つまり、「ハチの一刺し」は、針が敵に内臓と共に残り、毒を注入し続け、自身は落命するのである。命懸けの一撃である。そのこと

のである。自分のチームを維持するために、命を懸ける仲間がいるということである。ミツバチは成長していく過程で、掃除、育児、採蜜、守衛というように、役割が変わっていく。それぞれが、それぞれの責務を忠実にこなしていく。かくして群れの維持は可能となるのである。

人間社会でも、成長発展していく組織、チームはミツバチ社会と全く同じである。捨て身で守る者がいない組織は弱い。攻撃されれば、ひとたまりもなく内部から崩壊していく。外部へ通じるスパイが現れ、敵に塩を贈ることになる。組織の中に、チームの中に、そういう反乱者、つまり内部告発者はいないか。それは結局、組織破壊者となるからである。もとより、内部告発されるような不埒な行為はしてはならないし、そのための偽装があつてはならない。

何故「偽り」がまかり通るのであるか。一口で言えば、拝金主義の末路である。「決して儲けたい」という一心から「偽り」が行われる。多くの殺人事件は金銭と欲が絡むものである。人の命はお金より軽いのである。これが末法の世の習いである。『葉隠』の口述者・山本常朝はこのことを繰り返して警告している。拝金と拝欲が悪の

すべての根源である。『葉隠』の書かれた1710年は、江戸中期、つまり江戸幕府が安定期に入り、元禄の享楽に現を抜かしていた時代であるが、その江戸時代と今日の平成時代とはいささかも変わっていない。これを改めるには、心棒が必要であり、何が正しく、何が悪なのかを見極める尺度が必要なのである。価値観の共有である。そこに登場するのが武士道である。武士とは上に立つものことである。道とは思想のことである。思想とは考え方とその行動である。したがって、武士道とは、上に立つ者の考え方と行動を意味する。それに最も適したものと

して、武士道の聖典である『葉隠』がある。『葉隠』は治世の書であるとともに、日常生活における実践性の高い思想書である、というのである。

平成26年度第3回理事会及び臨時評議員会の実施報告等

事務局長 羽瀧 徹也

一 平成26年度第3回理事会及び臨時評議員会の実施報告

臨時評議員会の実施報告

昨平成26年11月26日(水)に、当顕彰会事務室において第3回理事会が、及び同年12月11日(木)に、靖国会館において臨時評議員会が、それぞれ開催され、別掲の平成27年度事業計画及び収支予算(正味財産増減予算書(案))が審議され、いずれも平成27年度計画として承認されました。

なお、理事会及び評議員会においては、一昨年から実施されている当顕彰会の全体委員会による事業計画の策定及び実施結果等について、衣笠専務理事から説明が行われました。

なお、本平成27年3月の定時評議員会をもって任期満了となる理事及び評議員が多数を占めておりますが、本年1月末現在の理事及び評議員は、次のとおりです。

理事

理事長 杉山 蕃

副理事長 藤田 幸生

専務理事 衣笠 陽雄

その他の理事

白田 智子 笹 幸恵  
小倉 利之 水町 博勝  
理事兼事務局長 羽瀧 徹也  
評議員  
秋山 政隆 穴山 正司  
飯田 正能 石井 光政  
石井 千春 及川 昌彦  
太田 兼照 大穂 園井  
倉形 桃代 高嶋 博視  
中江 仁 新垣 敬輝  
根木 東洋 早川 雅彦

二 第36回特攻隊合同慰霊祭の開催について

会報第1004号に「第36回特攻隊合同慰霊祭御案内」を同封しておりますが、会員の皆様方のみならず、ご家族、お知り合いの方などお誘い合わせの上、多数ご出席下さるようお願い申し上げます。

なお、昨年から懇親会費は従前の五〇〇〇円から四、〇〇〇円と安く抑え、参加しやすくしています。

出席される方は、同封の「郵便払込取扱票」にご記入の上、お申し込みください。

① 慰霊祭の日時・場所

平成27年3月28日(土) 靖國神社

参集殿・集合完了 10時45分

慰霊祭 靖國神社拝殿・本殿

② 懇親会の場所・時間 11時 ~ 12時  
靖国会館2階 12時30分 ~ 14時

③ 会費

慰霊祭及び懇親会出席者

六、〇〇〇円

慰霊祭のみの出席者

二、〇〇〇円

※なお、案内書にも記載してありますが、前回に引き続き慰霊祭及び懇親会終了時に、最寄り駅までの送迎バスを運行しますので、ご利用の方はお申し込み下さい。

三 平成27年度年会費の納入について

平成27年度の会費を納入していただくために、会報「特攻」第1004号に「郵便払込取扱票」を同封しておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、会費欄の上に入金済みと表示してあります方は、既に領収済みですから、お納めいただく必要はありません。

○平成27年度事業計画

一方 針

当公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会(以下「顕彰会」という。)は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を主たる事業として各種公益目的事業を積極的に推進する。この際、顕彰会活動全般の活性化並びに全体委員会を核とした募集・広報活動による会勢拡充を図る。これがため、実行の中核組織たる全体委員会の強化、特に全体委員会委員の特攻隊に関する資質及び指導力・行動力の向上を図る。

二 各種実施事業

1 慰霊・顕彰事業

ア 顕彰会が主催する3月28日(土)の靖國神社における特攻隊合同慰霊祭の実施、及び世田谷山観音寺が主催する9月23日(水)の同寺における特攻平和観音年次法要への協力・支援を行う。

イ 国内外の他慰霊団体が実施する特攻隊戦没者関係慰霊祭等には、積極的に参加又は協力する。この際、陸海軍のバランス及び特攻作戦の種別等を考慮するとともに、当該慰霊祭等の実情の把握、全国



(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
平成27年度正味財産増減予算書

平成27年1月1日から平成27年12月31日まで

(単位:円)

科 目	予算額	前年度予算額	増 減	備 考
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
① 基本財産運用益	6,630,000	6,853,000	△ 223,000	債権受取利息減少
② 特定資産運用益	940,000	447,000	493,000	
③ 年会費	4,300,000	4,600,000	△ 300,000	会員減少
④ 慰霊事業益	2,390,000	2,440,000	△ 50,000	
⑤ 出版事業益	100,000	90,000	10,000	
⑥ 受取寄付金	2,500,000	2,700,000	△ 200,000	会員減少
⑦ 雑収入	10,000	10,000	0	
経常収益計	16,870,000	17,140,000	△ 270,000	
(2) 経常費用				
慰霊祭懇親会費	480,000	620,000	△ 140,000	
像制作委託費	1,320,000	600,000	720,000	2体分を予定
発送等委託費	1,560,000	1,600,000	△ 40,000	
他団体寄付金	1,830,000	1,880,000	△ 50,000	
役員報酬	400,000	400,000	0	
給料手当	4,000,000	3,980,000	20,000	
福利厚生費	660,000	580,000	80,000	
旅費交通費	2,430,000	2,650,000	△ 220,000	
通信運搬費	460,000	420,000	40,000	
減価償却費	91,742	174,024	△ 82,282	
消耗品費	570,000	430,000	140,000	
印刷製本費	3,000,000	2,510,000	490,000	
会議費	170,000	150,000	20,000	
光熱水料費	120,000	100,000	20,000	
賃借料	1,820,000	1,620,000	200,000	
諸謝金	80,000	470,000	△ 390,000	
雑支出	10,000	100,000	△ 90,000	
退職手当引当資産繰入支出	182,000	296,000	△ 114,000	
経常費用計	19,183,742	18,580,024	603,718	
評価損益等調整前経常増減	△ 2,313,742	△ 1,440,024	△ 873,718	
基本財産評価損益等	0	396,000	△ 396,000	
特定資産評価損益等	0	0	0	
当期経常増減額	△ 2,313,742	△ 1,044,024	△ 1,269,718	
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益	0	0	0	
特攻像建立基金取崩	0	0	0	
投資活動収益計	0	0	0	
(2) 経常外費用	0	0	0	
特定資産への振替	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	0	
当期一般正味財産増減額	△ 2,313,742	△ 1,044,024	△ 1,269,718	
一般正味財産期首残高	296,255,426	16,825,451	279,429,975	26'決算見込値計上
一般正味財産期末残高	293,941,684	296,255,426	△ 2,313,742	
II 指定正味財産増減の部	0	0	0	
一般正味財産への振替	0	278,000,000	△ 278,000,000	26'決算見込値計上
当期指定正味財産増減額	0	△ 278,000,000	278,000,000	
指定正味財産期首残高	0	278,000,000	△ 278,000,000	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	293,941,684	296,255,426	△ 2,313,742	

慰霊祭等の情報収集に努める。また、若手会員の参加を考慮する。

ウ 主として、全体委員会委員に対し、特攻隊に関する勉強会、講習会、研修会等を実施して、慰霊・顕彰事業に資するとともに、会員の特攻隊に関する資質の向上を図る。この際、講習会及び研修会については、部外者の参加も考慮する。

エ 月例法要(月例参拝)  
特攻隊員の慰霊・顕彰及び「特攻平和観音」関連知識の向上のため、世田谷山観音寺が毎月18日に実施する特攻平和観音月例法要に積極的に参加する。この際、一般の参加者等に対する募集・広報にも留意する。

2 募集・広報事業

ア 募集

広報活動と一体化した効果的な募集活動により、会員の獲得に努める。この際、全体委員会委員に募集目標を付与し、全体委員自ら募集成果を上げ、一般会員の募集意識振作への波及効果を期する。

イ 広報

① 歴史的資料として、また、特攻隊の功績を国民に広報・普及・継承するための広報誌として、会報

『特攻』を発行し、全会員に配布するとともに、会員以外の希望者に頒布する。

② 平成26年度に作成・試行した「会報『特攻』」の編集・発行について(試行案)を一部修正し、平成27年当初から試行する。また、編集委員会により、公益法人に相応しい発行態勢・要領・記事内容であるかどうかを常時点検する。

③ ホームページをリニューアルするとともに、維持管理に当たっては、常に最新化に留意するとともに、セキユリティーを重視し、トラブル発生時には、委託業者と連携して迅速に回復する態勢を常に保持する。また、ホームページ上に、会報『特攻』の内容を公開するとともに、可能な範囲で特攻隊戦没者に関わる慰霊祭情報等を掲載し、広報する。また、法令に定められた当顕彰会の運営状況等の情報を公開する。

3 「特攻勇士之像」建立事業

護国神社等へ「特攻勇士之像」を奉納する事業を継続する。このため、像

の受入れ可能な護国神社、維持管理のための奉賛会等についての情報を収集し、建立事業を推進する。平成27年度

においては、長野、岐阜、徳島、札幌(旭川)の各護国神社を重視して、情報を収集する。また、建立に際しては、

報を収集する。また、建立に際しては、努めて奉賛会等の組織を確立し、建立後は、その主催の下に「特攻勇士之像」独自の慰霊祭ができるよう説得し、調整する。

4 出版事業

特攻隊及び特攻隊戦没者等に関する史実の調査及び研究資料等の収集を行う。この際、可能な限り、特攻関係者からの直接聴取、各地の慰霊祭・資料館等での資料発掘等に努め、記録し、保管する。特に、特攻隊関係者からの収集については、高齢化を考慮して手遅れにならないよう、優先順位を付け、計画的に実施する。また、平成26年度に整理・公開された「特攻ライブラリー」の更なる充実・活用を図り、会員の資質向上に寄与させる。

三 全体委員会事業

1 顕彰会の事業は、全体委員会が計画・実施する。全体委員会は、平成26年度末の全体委員会の態勢をもって、引き続き顕彰会の業務執行の中核機関と位置付け、活動する。このため、全体委員会委員長(専務理事)及び事務局が主体となって事業全般の計画を作

成し、各事業ごとに担当者(補佐者・指導者)を指名し、当該事業を計画実施させる。

2 全体委員会委員の資質向上施策は、全体委員会委員を主対象として、特攻隊に関する資質の向上を図ることを目的とし、講演会、勉強会、研修会に区分し、計画実施する。細部は専務理事又は業務執行理事が計画する。講演会・研修会については、委員以外の会員及び部外者の参加も考慮する。

事務局からの報告等

寄附者御芳名(敬称略)

(平成26年10月1日～12月31日)(単位千円)

- 五〇 松中 義昭 一〇 中里 英二
- 七 加嶋 昭男 七 高橋こすみ
- 七 菊池 国光 七 藤本 松彦
- 六 松本 浩一 三 窪田 隆
- 三 西村 洋文 二 藤井 常男
- 二 河野 一欣 二 紙谷八十二
- 二 萩原 正俊 二 大谷 安信
- 二 小野 好永 一 荒井 和彦

◇ ◇ ◇

御芳志誠に有り難うございました。



新入会員名簿 (敬称略)

(平成26年10月1日～12月31日)

青森県 小笠原孝志

岩手県 星 道弘

宮城県 佐々木 洋

福島県 陳野 重美

群馬県 富澤 勝久

埼玉県 小野寺正則

東京都 新井 重夫

東京都 畑 政宏

神奈川県 山口 高治

神奈川県 村上 雅英

金澤 真史

長野 荻野 信

熊本県 村上 恵一

鹿児島県 山口 英晃

海外 早瀬 登

神奈川県

中里 英二 (26・2・18)

松本栄三郎 (24・8・15)

大槻 二郎

鈴木 敏

今野 二郎

杉村 俊一 (25・11・2)

宇井 豊

藤堂 武 (26・11・9)

静岡県 平岡 辰夫 (26・8・25)

小宮山玄二 (26・5・10)

福岡県 谷口 茂海 (26・10・15)

宮崎県 宮田 典男

会報『特攻』第103号

正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、おわび申し上げます。

(訂正箇所)

7頁3段右写真(横書き説明文)

誤「鹿屋航空基地資料館」

正「鹿屋航空基地史料館」

8頁上段③の日時

誤「27・4・5(日)」

正「27・4・6(月)」

8頁下段23第49回若潮会慰霊祭

取止め

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化

昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

初代会長 竹田 恒徳 元宮様

二代会長 瀬島 龍三 氏

平成5年11月財団法人認可

三代会長 山本 卓真 氏

平成23年1月公益財団法人認定

現理事長 杉山 蕃 氏

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰

・広報誌等の発行

・講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員 3000円

・学生会員 1000円

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内 公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局

電話 03-5213-4594

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。

2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局に任せ願います。

3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。

5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内 公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局

電話 03-5213-4594

FAX 03-5213-4596

会員訃報 (敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

群馬県 上原 富次 (26・6・18)

埼玉県 新井 文央 (26・8・10)

千葉県 新井 省吾 (26・5・22)

千葉県 澤田 和夫 (26・7・15)

東京都 富岡 幸雄 (26・7・15)

東京都 田中 靖浩

東京都 茂木 明治

東京都 原田 昇 (26・8・25)